えびの市埋蔵文化財調査報告書　第16集

小木原遺跡群
蕨地区（C・D地区）
久見迫B地区
地主原地区
原田・上江遺跡群
六部市遺跡
蔵元遺跡
中満遺跡
法光寺遺跡　Ⅰ・Ⅱ

上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書　II

1996

宮崎県えびの市教育委員会

えびの市埋蔵文化財調査報告書　第16集

小木原遺跡群
蕨地区（C・D地区）
久見迫B地区
地主原地区
原田・上江遺跡群
六部市遺跡
蔵元遺跡
中満遺跡
法光寺遺跡　Ⅰ・Ⅱ

上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書　II

１９９６

宮崎県えびの市教育委員会

序　文

えびの市は、日向・薩摩・大隅の分岐点にあたり、古くから様々な文化が交流した地域です。現在は九州縦貫自動車道も開通し、南九州の要となっております。

市内中央を西流する川内川の氾濫原よりも高位にある段丘面のほとんどは周知の遺跡となっており、遺跡の宝庫ともいえる地域です。

昭和60年度、上江・池島地区180haを対象とする県営圃場整備事業が着工しました。対象地域は全面が周知の遺跡となっていることから関係機関との協議や事前の試掘調査を重ね、保存が困難な地区については、数次にわたって発掘調査を実施してきました。昭和61年度に調査した永田原遺跡と昭和62年度に調査した小木原遺跡群蕨ＡＢ地区とロノ坪遺跡については、すでに『発掘調査報告書Ｉ』として本報告が刊行されております。

本書は、昭和63年度に調査した蕨ＣＤ・久見迫・地主原地区、平成２年度の六部市遺跡、平成４年度の蔵元・中満・法光寺遺跡、さらには平成５年度の法光寺遺跡（第２次）の調査報告書であり、総まとめでもあります。縄文時代から近代に至るまで、様々な遺構や遺物が出土しており、上江・池島地区の台地の開発の歴史が明らかになりましたが、本書が学術資料としてだけでなく、社会教育や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が深まれば幸いです。

末筆ながら、調査にあたって御指導・御協力いただいた諸先生方および県文化課の方々、調査終了後の整理作業から原稿執筆まで御協力いただいた県文化課の方々ならびに調査に対して御理解・御協力いただいた工事関係者・地元の方々、発掘作業および整理作業に従事していただいた方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成８年３月

えびの市教育委員会
教育長　平　田　郁　郎

例　言

1．本書は、上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う小木原遺跡群蕨地区、久見迫B地区、地主原地区、六部市遺跡、蔵元遺跡、中満遺跡、法光寺遺跡（1・2次）の発掘調査報告書である。

2．事業は西諸県農林振興局の委託を受けて、えびの市教育委員会が主体となり、県文化課の協力を得た。

3．本報告書の執筆分担は以下のとおりである。

はじめに……中野　和浩

小木原遺跡群　蕨・久見迫B・地主原地区……同　上

原田・上江遺跡群　六部市遺跡……東　　憲章（県文化課）

原田・上江遺跡群　蔵元・中満・法光寺遺跡Ⅰ……戸高真知子（県文化課）

原田・上江遺跡群　法光寺遺跡　Ⅱ……中野　和浩

4．小木原遺跡群においては、土壌分析を宮崎県総合農業試験場の有村玄洋氏に、プラント・オパール分析を宮崎大学農学部の藤原宏志教授に委託し、それぞれの玉稿をいただいているので加えて報告する。

5．出土遺物および関連資料は、えびの市歴史民俗資料館に保管している。

6．本書の編集は中野が行なったが、遺構の略号や表現方法・文体などは統一していない。

総　目　次

はじめに……1
遺跡の位置と歴史的環境……2
小木原遺跡群の調査……11
小木原遺跡群蕨Ｃ地区……11
小木原遺跡群蕨Ｄ地区……31
小木原遺跡群久見迫Ｂ地区……32
小木原遺跡群地主原Ａ地区……43
小木原遺跡群地主原Ｂ地区……43
小木原遺跡群の土壌調査……155
小木原遺跡群におけるプラント・オパール分析……157
原田・上江遺跡群　六部市遺跡……163
原田・上江遺跡群　蔵元遺跡……217
原田・上江遺跡群　法光寺遺跡Ⅰ……248
原田・上江遺跡群　中満遺跡……276
原田・上江遺跡群　法光寺遺跡Ⅱ……319

Ⅰ．はじめに

1．調査の経緯

上江・池島地区県営圃場整備事業は総面積が180haに及び、しかも全域が周知の遺跡である。事業は昭和59年度に着手し、平成７年度に完了である。

昭和61年度には永田原遺跡を、昭和62年度には小木原遺跡群蕨地区（Ａ・Ｂ地区）と口ノ坪遺跡を発掘調査し、その結果は『調査報告書Ⅰ』として刊行されている。

昭和63年度以降も事前の発掘調査が必要となるのは必至であり、年度ごとに西諸県農林振興局・県文化課・県土地改良連合会・上江土地改良・市耕地課および市教育委員会で埋蔵文化財の保護について協議を行ない、県文化課による試掘調査結果と事業計画図とを照合し、発掘調査が必要となる区域を決めて実施した。

各遺跡の調査期間は以下のとおりである。

蕨・久見迫Ｂ・地主原地区
　昭和63年８月９日から平成元年２月２日まで
六部市遺跡
　平成２年12月４日から平成３年２月８日まで
蔵元・中満・法光寺遺跡Ⅰ
　平成４年11月15日から平成５年３月11日まで
法光寺遺跡Ⅱ
　平成５年11月11日から12月８日まで

2．調査組織

特別調査員

鹿児島大学教授　上村俊雄（昭和63年度）
宮崎大学教授　藤原宏志（昭和63年度）
県総合農業試験場　有村玄洋（昭和63年度）
佐賀県立九州陶磁文化館　大橋康二（昭和63・平成４年度）

調査主体　えびの市教育委員会

教育長　平田敏正（昭和63年・平成２年度）
　平田郁郎（平成４年度～）
社会教育課長　萩原利典（昭和63年度）
　上別府文夫（平成２年度）
　外園秀雄（平成４・５年度）
　藤嶋　勉（平成５年度～）
課長補佐　上別府文夫（昭和63年度）
　野間寛俊（平成２年度）
　境田　貢（平成４年度）
　馬越脇泰二（平成５年度～）
社会教育係長　浜松政弘（昭和63年度）
　境田　貢（平成２年度）
　松田輝久（平成４年度）
　上加世田たず子（平成５年度）
　木村政一（平成７年度）
主事・事務　白川良一（昭和63年度）
　上加世田たず子（平成２～５年度）
　赤崎由美（平成４年度～）
調査員　中野和浩（昭和63年度～）

調査員

宮崎県教育庁文化課主事　東　憲章（平成２年度）
　同　上　戸高真知子（平成４年度）
　同　上　吉本正典（平成５年度）

調査協力

九州大学文学部　助手　西健一郎
宮崎県教育庁文化課　係長　面高哲郎
　同　上　主任主事　永友良典

なお調査にあたり、工事関係者や、亀園耕作氏（土地改良理事長）をはじめとする上江地区の地元の方々には多大な御援助・御協力を賜り、調査が円滑に進んだ。

3．遺跡の位置と歴史的環境（第１図）

本書に報告する遺跡群は、本市の盆地中央を西流する川内川とその支流の池島川に挟まれた広大な低位段丘（原田・上江遺跡群（２）として周知）の西半部に位置する。

旧石器時代

遺構は発見されていないが、妙見遺跡[1]でナイフ形石器12点、剝片尖頭器１点、台形石器１点、三稜尖頭器１点、細石刃核４点、細石刃13点が、八幡丘遺跡[2](38)でナイフ形石器１点が出土している。

遺跡としては、標高280m以上の高位面に立地していると思われる。

縄文時代

周知の遺跡ほとんどで遺物が発見されているが、大まかな傾向としては高位段丘に早期、中位段丘に前期～中期、低位段丘に後期、最低位段丘に晩期の遺跡が多い。

早期の調査例は少なく、妙見遺跡[3]で集石遺構が13基、二本杉遺跡[4](ア)では22基検出された。また、八幡丘の切り通しには数期の集石遺構が露出している。

後期に入ると遺跡が増大する。役所田遺跡[5](77)では大型土坑と後期中頃～晩期にかけての土器片が８万点余り出土している。上田代遺跡[6](エ)では９軒の竪穴式住居などのほか、中期末～晩期前半の土器片が４万点余り出土している。

晩期の桑田遺跡[7](50)からは突帯文土器を伴う溝状遺構や土坑が検出され、プラント・オパールも発見された。

弥生時代

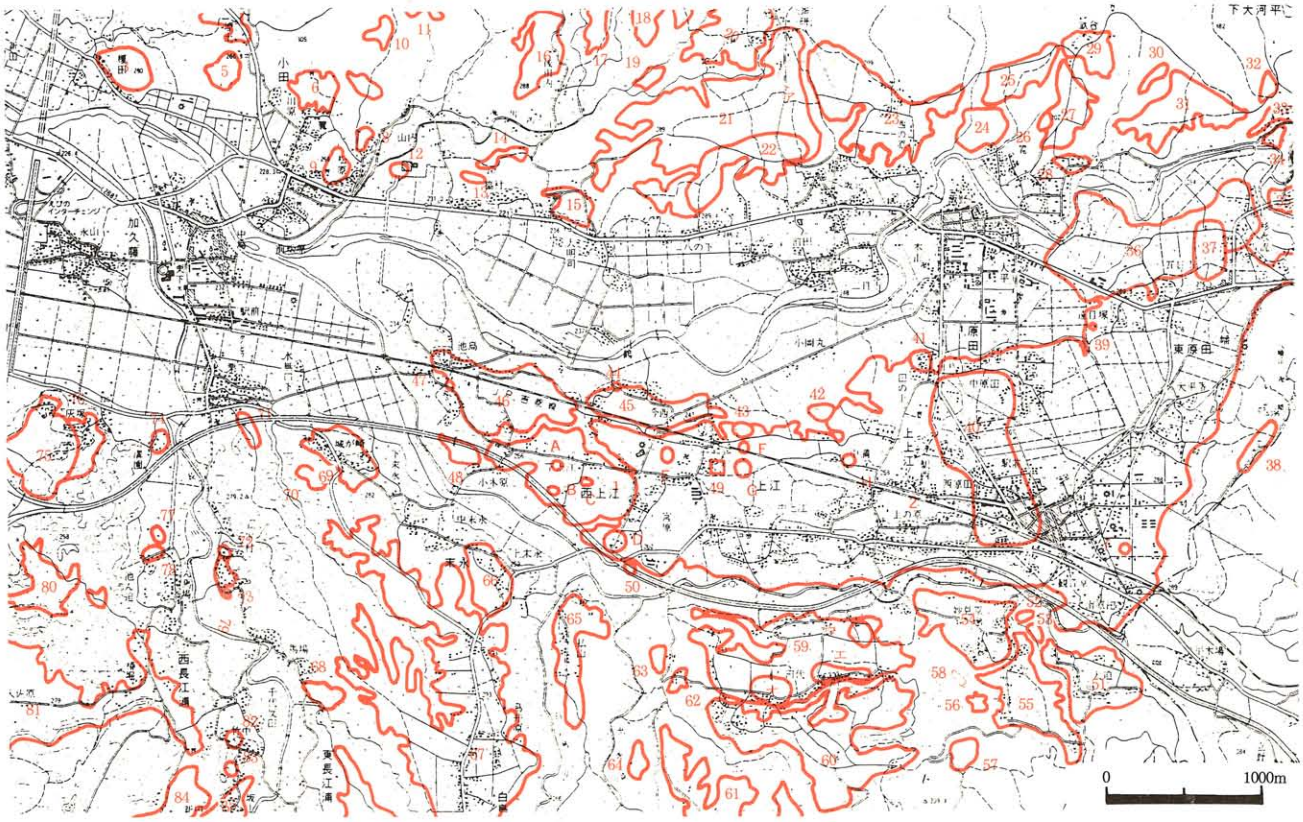
前～中期の遺物は稀少である。後期の遺跡は年々増加し、広畑遺跡(21)の北東部と南東部、永田原遺跡(46)、二本杉遺跡、本地原遺跡[8](イ)、松山遺跡[9](ウ)では花弁状住居が検出されている。

古墳時代

現在、高位段丘面でのみ竪穴式住居が発見されており、妙見遺跡では41軒、馬場田遺跡[10](83)で10数軒、内丸[11]遺跡で３軒、園田城跡[12]で２軒、上田代遺跡で17軒を数える。

水捌けの良い洪積世砂礫段丘には板石積石室墓や地下式横穴墓群が営まれる。これらは島内[13]・灰塚[14](75)・小木原[15]、遠目塚[16](39)、建山(40)[17]、芋畑(22)[18]、杉水流(37)の７地域に数基～数10基単位で群集する。なお、上田代遺跡では小型のもの１基が発見された。

小木原[19]では、昭和62年度の蕨地区の調査において、木蓋土壙墓52基、木棺墓６基、板石積石室墓８基、横口式土壙墓７基、地下式横穴墓60基余りが確認されている。島内と建山には復元推定直径23mの墳丘があり、首長墓の規模の画一性を推定させる。



遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（１：50,000）

奈良時代

市内で最も稀薄した時期（氾濫原に降りているのか）で、天神免遺跡で須恵器の骨蔵器２点が、妙見原遺跡[20]の遺物包含層から数点の遺物が出土しているにすぎない。

平安時代

広大な台地（段丘面）の開発が始まり、台地中央部付近に居住して周辺で畑作（陸稲も含む）を営むか、最低位段丘に居住して谷や氾濫原で水稲耕作を営んでいたと思われ、小路ノ下遺跡[21](78)や小木原遺跡群、永田原遺跡、田代地区遺跡群(59)などで集落跡が発見されている。

昌明寺遺跡[22]の調査では、集落端縁の旧谷から墨書土器146点（うち33点は黒色土器）や越州窯系青磁、木器・木製品[23]（椀・皿・箸・櫛・曲物・下駄・鋤・鍬・柄・刳り物）なども出土し、南九州では注目される。

法光寺跡[24](49)は10世紀前半頃廃絶した寺跡で、布目瓦を有する。軒瓦はまだ発見されていない。

中世

人口増加、耕作地の拡大に伴って集落も台地縁辺部に移動していく。台地では計画的な直線の水路や畦畔が築かれる。肥沃な氾濫原も含めた盆地一帯は領土争奪戦の的となり、市内の丘陵突端部33ヶ所に山城が築かれる。

園田城跡[25](３)は、唯一発掘調査を実施しているが、平安時代の集落と重複しているため、郭内の構造を復元するのが困難である。

近世以降

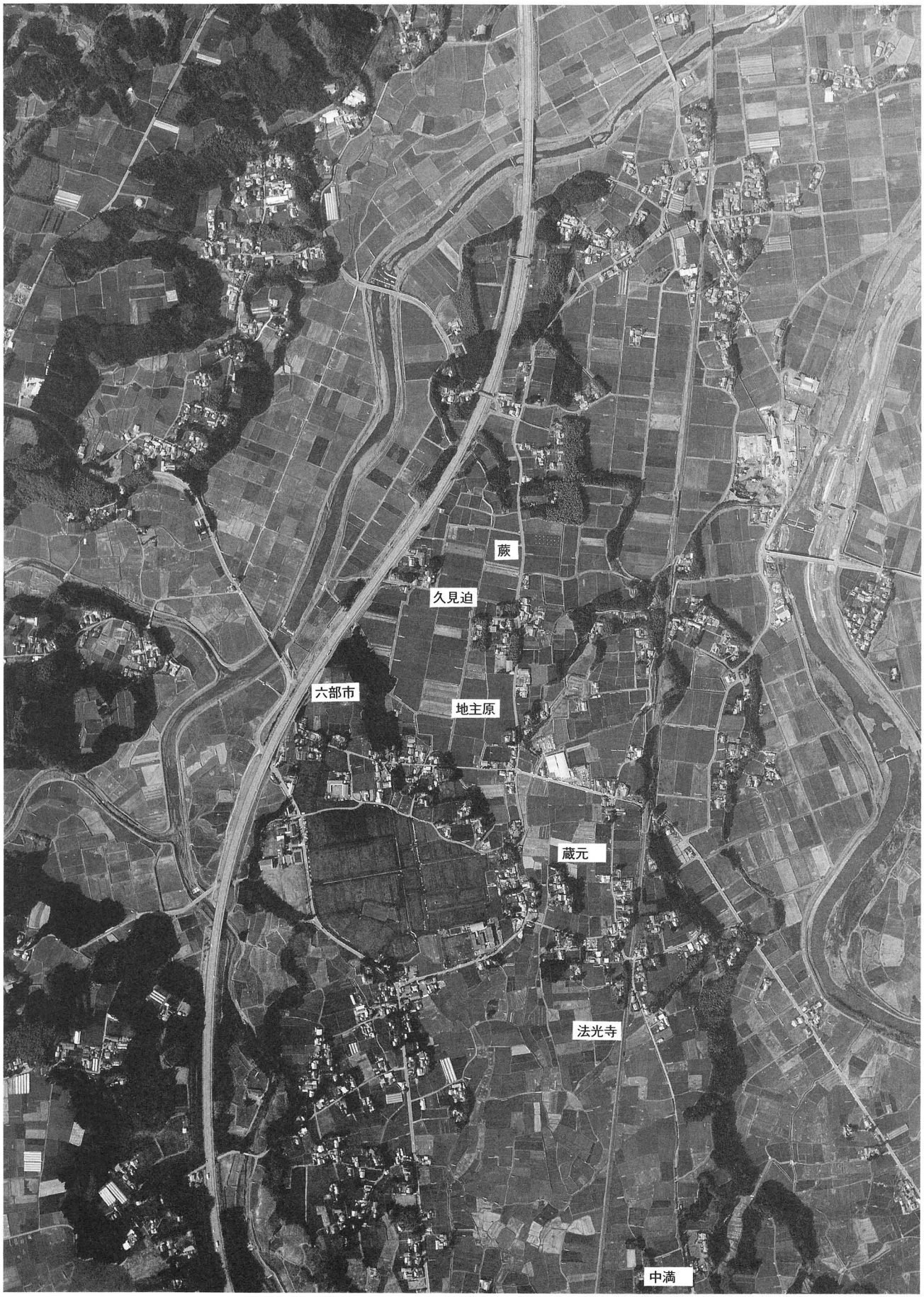
島津氏支配の後は、増々耕地が拡大されるとともに、整備が繰り返される。集落は台地の縁か山裾へと移動し、最大限の可耕地を生み出す。

集落において欠かせない井戸は、本市においては近代に至るまで登場しない。豊富な湧水に恵まれているからである。

註

（１）宮崎県教育委員会『野久首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡』1994
（２）『えびの市史　上巻』えびの市　1994
（３）（１）と同じ
（４）平成６年度調査、未報告
（５）えびの市教育委員会『長江浦地区遺跡群　役所田・小路ノ下遺跡』1993
（６）　同　『田代地区遺跡群　上田代遺跡』1994
（７）中野和浩「宮崎県えびの市桑田遺跡」『日本考古学年報43』日本考古学協会1992
（８）宮崎県教育委員会『本地原遺跡』1994
（９）えびの市教育委員会『田代地区遺跡群　上田代・松山・竹之内遺跡』1995
（10）　同　『長江浦地区遺跡群　内丸・弁財天・馬場田遺跡』1992
（11）　同上
（12）平成３年度調査，未報告、（２）に所収
（13）平成６・７年度で47基を調査，短甲２・冑１・蛇行剣８～９ほか多数出土
（13～18）は（２）所収
（18）えびの市教育委員会『広畑遺跡』1991
（19）永友良典「小木原遺跡群蕨地区」『永田原遺跡・小木原遺跡群蕨地区・ロノ坪遺跡』1990　えびの市教育委員会
（20）えびの市教育委員会『妙見原遺跡』1996
（21）（５）と同じ
（22）平成７年度調査，未報告
（23）10～15世紀代のもので、年代決定が困難
（24）えびの市教育委員会『えびの市遺跡群詳細分布調査報告書』1985
（25）（２）と同じ

番号	遺跡名	時代	主要遺構
1	小木原地下式横穴群	縄文～近世	板石積石室墓ほか
A	蕨C地区	古墳～近世	地下式横穴
B	久見迫B地区	縄文～近世	地下式横穴
C	地主原地区	中世～近代	柱穴
2	原田・上江遺跡群	縄文～近代	
D	六部市遺跡	縄文～近世	竪穴状遺構
E	蔵元遺跡	中世～近世	柱穴
F	法光寺遺跡Ⅰ	平安～中世	掘立柱建物
G	法光寺遺跡Ⅱ	平安～中世	柱穴・道路
H	中満遺跡	中世～近世	柱穴
3	園田城跡	縄文～中世	郭２・道路・階段
4	丸尾遺跡	縄文～平安	散布地
5	埋土遺跡	縄文～平安	散布地
6	加久藤城跡	中世	郭ほか
7	新城	縄文～中世	山城
8	尾山遺跡	平安	散布地
9	小城	縄文～中世	山城
10	新城	縄文～中世	山城
11	城内第３遺跡	縄文～古墳	散布地
12	平城	中世	山城（消滅）
13	宮之城	中世	山城
14	大名司鳥越遺跡	古墳	散布地
15	越シ遺跡	古墳	散布地
16	壱合原遺跡	古墳	散布地
17	山神原遺跡	縄文～古墳	散布地
18	苧畑第３遺跡	縄文～古墳	散布地
19	苧畑第２遺跡	縄文	散布地
20	苧畑第１遺跡	縄文～古墳	花弁状住居
21	広畑遺跡	縄文～古墳	散布地
22	苧畑地下式横穴群	古墳	板石積石室墓ほか
23	稲荷下遺跡	縄文～平安	掘立柱建物
24	飯野城跡	古墳～中世	郭
25	極奄遺跡	古墳～平安	散布地
26	金丸城跡	中世	散布地
27	愛染院遺跡	古墳	散布地
28	佐院遺跡	古墳	散布地
29	中須遺跡	縄文～平安	散布地
30	畝倉第２遺跡	古墳	散布地
31	畝倉第１遺跡	縄文～古墳	散布地
32	平田遺跡	縄文	散布地
33	久保原遺跡	古墳	散布地
34	笠牟田遺跡	古墳	散布地
35	小牧遺跡	古墳	散布地
36	杉水流遺跡	古墳	散布地
37	杉水流地下式横穴群	古墳	地下式横穴
38	八幡丘遺跡	旧石器～縄文	ナイフ型石器・集石
39	遠目塚地下式横穴群	古墳	地下式横穴
40	建山地下式横穴群	古墳	地下式横穴
41	田之上城	中世	山城
42	古城	中世	山城
43	上江城	中世	山城
44	香取神社（一之宮）	平安	
45	ロノ坪遺跡	平安	溝
46	永田原遺跡	平安～中世	居館
47	木崎原古戦場跡	中世	六地蔵塔ほか
48	鳥越城跡	中世	山城
49	法光寺跡	平安	掘立柱建物
50	桑田遺跡	縄文～中世	掘立柱建物
51	大迫原遺跡	古墳	板石積石室墓
52	大迫第２遺跡	縄文	散布地
53	大迫第１遺跡	古墳	散布地
54	妙見原遺跡	縄文～中世	散布地
55	石落下遺跡	縄文～古墳	散布地
56	田原陣遺跡	弥生	散布地
57	鳶ノ木遺跡	弥生～古墳	散布地
58	田原陣跡	中世	郭
59	田代地区遺跡群	縄文～近世	掘立柱建物ほか
60	天宮遺跡	縄文～中世	散布地
61	樅木原遺跡	縄文～古墳	散布地
62	後迫遺跡	平安	散布地
63	井穴遺跡	縄文～古墳	散布地
64	粥谷遺跡	縄文～弥生	散布地
65	曲田遺跡	縄文～古墳	散布地
66	村ノ前遺跡	縄文～古墳	散布地
67	柊野第１遺跡	縄文～平安	散布地
68	畑田城跡	中世	山城
69	城ケ崎遺跡	弥生	散布地
70	柿ノ木城跡	弥生～中世	山城
71	稲荷城跡	弥生～中世	山城
72	小屋敷城跡	中世	山城
73	鶴田越遺跡	古墳	散布地
74	溝園城	中世	山城
75	灰塚地下式横穴群	古墳	板石積石室墓ほか
76	灰塚遺跡	縄文～平安	散布地
77	役所田遺跡	縄文～中世	土坑ほか
78	小路ノ下遺跡	平安～近世	掘立柱建物ほか
79	長牟田遺跡	古墳	散布地
80	中ノ原遺跡	縄文～古墳	散布地
81	岡本遺跡	縄文～平安	散布地
82	弁財天遺跡	縄文～中世	掘立柱建物ほか
83	馬場田遺跡	縄文～中世	竪穴住居ほか
84	新田遺跡	縄文～平安	散布地
85	内丸遺跡	縄文～古墳	竪穴住居ほか
ア	二本杉遺跡	縄文～弥生	花弁状住居ほか
イ	本地原遺跡	弥生	花弁状住居
ウ	松山遺跡	縄文～弥生	花弁状住居ほか
エ	上田代遺跡	縄文～近世	掘立柱建物ほか
オ	竹之内遺跡	縄文～近代	掘立柱建物ほか



遺跡周辺の航空写真

小木原遺跡群

蕨地区　（C・D地区）

久見迫B地区

地主原地区

凡　例

1．本編で使用している遺構番号は、昭和62年度調査区との継続にしている。

2．地下式横穴墓については、概要報告では蕨Ｃ地区と久見迫Ｂ地区を区別せずに通番で番号を付けた（ＳＴ－3001～3035）が、本報告では、蕨Ｃ地区にはＳＴ－3001～3022、久見迫Ｂ地区にはＳＴ－4001～4013と改変している。

3．溝状遺構（ＳＤ－21～64）と土壙墓（ＳＫ－101～111）については、概報どおりである。

目　次

Ⅰ．はじめに……11
Ⅱ．試掘調査……11
Ⅲ．発掘調査
　１．試掘溝Ｃ１拡張区……11
　２．試掘溝Ｄ１拡張区……11
　３．蕨Ｃ地区……12
　４．蕨Ｄ地区……31
　５．久見迫Ｂ地区……32
　６．地主原Ａ地区……43
　７．地主原Ｂ地区……43
Ⅳ．まとめ……83

挿　図　目　次

第１図　試掘溝および発掘坑位置図……13～14
第２図　試掘溝Ａ拡張区ＳＤ－21層序図……16
第３図　試掘溝Ｃ１拡張区遺構実測図……17～18
第４図　試掘溝Ｄ１拡張区遺構・西壁層序図……19～20
第５図　試掘溝Ｄ１拡張区ＳＫ－103実測図 ……21
第６図　試掘溝Ｃ１拡張区・Ｄ１拡張区出土遺物
　　実測図……22
第７図　蕨Ｃ地区遺構分布図……23
第８図　蕨Ｃ－０区東半～１区遺構分布図……24
第９図　蕨Ｃ－２区遺構分布図……25
第10図　蕨Ｃ－１区東壁層序実測図……26
第11図　蕨Ｃ－２区東壁層序実測図……27
第12図　ＳＴ－3007　遺構実測図……28
第13図　ＳＴ－3008　遺構実測図……28
第14図　ＳＴ－3009　遺構実測図……29
第15図　ＳＴ－3010　遺構実測図……30
第16図　ＳＴ－3011　遺構実測図……31
第17図　ＳＴ－3012　遺構実測図……31
第18図　ＳＴ－3013　遺構実測図……32
第19図　ＳＴ－3014　遺構実測図……33
第20図　ＳＴ－3015　遺構実測図……34
第21図　ＳＴ－3016　遺構実測図……35
第22図　ＳＴ－3017　遺構実測図……36
第23図　ＳＴ－3018　遺構実測図……37
第24図　ＳＴ－3019　遺構実測図……38
第25図　ＳＴ－3020　遺構実測図……39
第26図　ＳＴ－3022　遺構実測図……40
第27図　ＳＤ－43　遺構実測図……41
第28図　蕨地区出土土師器実測図……41
第29図　蕨Ｃ地区地下式横穴墓出土遺物実測図……42
第30図　蕨Ｄ地区遺構分布図……44
第31図　ＳＤ－61　層序図……44
第32図　久見迫Ｂ地区遺構分布図……45～46
第33図　久見迫Ｂ－４区南壁層序図……47
第34図　ＳＴ－4001　遺構実測図……48
第35図　ＳＴ－4002　遺構実測図……49
第36図　ＳＴ－4003　遺構実測図……50
第37図　ＳＴ－4004　遺構実測図……51
第38図　ＳＴ－4005　遺構実測図……52
第39図　ＳＴ－4006　遺構実測図……53
第40図　ＳＴ－4007　遺構実測図……54
第41図　ＳＴ－4008　遺構実測図……55
第42図　ＳＴ－4009　遺構実測図……56
第43図　ＳＴ－4011　遺構実測図……57
第44図　ＳＴ－4012　遺構実測図……58
第45図　ＳＴ－4013　遺構実測図……59
第46図　地下式横穴墓出土遺物実測図（１）……60
第47図　地下式横穴墓出土遺物実測図（２）……61
第48図　地下式横穴墓出土遺物実測図（３）……62
第49図　地下式横穴墓出土遺物実測図（４）……63
第50図　地下式横穴墓出土刀剣実測図……64
第51図　ＳＫ－110 遺構実測図……65
第52図　ＳＫ107・110出土遺物実測図……65
第53図　ＳＫ－104 遺構実測図……66
第54図　ＳＫ－104 出土遺物実測図……66
第55図　ＳＴ－4011西側土器群実測図……66
第56図　ＳＺ－11　遺構実測図……67
第57図　ＳＺ－13　遺構実測図……68
第58図　地主原Ａ地区遺構分布図……69
第59図　ＳＡ－01　遺構実測図……70
第60図　久見迫Ｂ地区出土土師器・土製品実測図……71
第61図　調査区出土中世国産陶器実測図……72
第62図　調査区出土輸入陶磁器実測図（１）……73
第63図　調査区出土輸入陶磁器実測図（２）……74
第64図　調査区出土須恵器実測図……74
第65図　調査区出土国産陶磁器実測図（１）……75
第66図　調査区出土国産陶磁器実測図（２）……76
第67図　調査区出土国産陶磁器実測図（３）……77
第68図　試掘溝Ｋ１・久見迫Ｂ地区出土砥石実測図…78
第69図　久見迫Ｂ地区出土軽石加工品・石臼実測図…79
第70図　久見迫Ｂ地区出土縄文土器実測図……80
第71図　久見迫Ｂ地区出土弥生土器実測図……80
第72図　久見迫Ｂ地区出土金属製品実測図……80
第73図　地主原Ａ地区出土土師器実測図……80
第74図　地主原Ａ地区金属製品実測図……80
第75図　地主原Ａ地区出土石器実測図……80
第76図　調査区検出溝状遺構分布図……81～82

図　版　目　次

図版１　試掘溝Ａ拡張区ＳＤ－24，ＳＤ－24断面，試掘溝Ｃ２全景，試掘溝Ｆ１全景，試掘溝Ｄ１プラント・オパール分析資料採取，土壌分析資料採取，蕨Ｃ－２区プラント・オパール分析資料採取

図版２　試掘溝Ｃ－1拡張区全景，西南部遺物出土状態，ＳＢ－01－ＰＰ－1断面・ＰＰ－3断面

図版３　試掘溝Ｄ１拡張区全景，ＳＤ－34全景

図版４　ＳＤ－34西壁断面層序，ＳＫ－103断面層序・アカホヤ塊出土状態・完掘状態

図版５　蕨Ｃ－１～２区全景，蕨Ｃ－２区東壁ＳＤ－21断面層序

図版６　蕨Ｃ－２区南半部遺構分布状態，ＳＴ－3020と周辺の溝状遺構

図版７　蕨Ｃ－０区遺構分布状態，蕨Ｃ－３区遺構検出状態

図版８　蕨Ｃ－２区東壁北部断面層序，東壁中央部断面層序，東壁南端部断面層序

図版９　ＳＴ－3007全景，断面層序

図版10　ＳＴ－3008竪坑とＳＤ－41，竪坑断面，羨門部人骨出土状態

図版11　ＳＴ－3009全景，ＳＴ－3013竪坑完掘状態

図版12　ＳＴ－3010全景，竪坑断面層序，羨門閉塞状態

図版13　ＳＴ－3012竪坑上部と排土の断面層序，排土の分布状態

図版14　ＳＴ－3014全景，ＳＴ－3015竪坑上部閉塞状態，完掘状態，竪坑西側の排土断面層序

図版15　ＳＴ－3016全景，竪坑上部閉塞状態，遺物出土状態

図版16　ＳＴ－3017全景，竪坑断面層序，羨門閉塞状態

図版17　ＳＴ－3018竪坑上部閉塞状態，全景，ＳＴ－3022全景

図版18　ＳＴ－3019全景，ＳＴ－3019と中世の溝状遺構

図版19　ＳＴ－3020全景，竪坑上部閉塞状態と陥没坑

図版20　蕨Ｄ地区遺構分布状態，Ⅲ区ＳＤ－61層序

図版21　久見迫Ｂ－１区遺構分布状態

図版22　久見迫Ｂ－４区遺構分布状態，Ｂ－２～４区遺構分布状態

図版23　久見迫Ｂ－４区南壁層序

図版24　ＳＴ－4001と風倒木痕，断面層序，遺物出土状態

図版25　ＳＴ－4002全景，羨門閉塞状態

図版26　ＳＴ－4003全景，竪坑断面層序，羨門閉塞状態

図版27　ＳＴ－4004全景，竪坑断面層序，羨門閉塞状態，玄室左奥遺物出土状態，玄室右手前遺物・人骨出土状態

図版28　ＳＴ－4005全景，竪坑断面層序，羨門閉塞状態，遺物出土状態

図版29　ＳＴ－4006全景，羨門閉塞状態，遺物出土状態，ＳＴ－4007竪坑断面層序，羨門閉塞状態

図版30　ＳＴ－4008全景，竪坑断面層序，羨門閉塞状態，遺物出土状態

図版31　ＳＴ－4009全景，竪坑断面層序，羨門閉塞状態

図版32　ＳＴ－4009全景，ＳＴ－4010玄室埋土，玄室

図版33　ＳＴ－4011全景，竪坑断面層序，羨門閉塞状態

図版34　ＳＴ－4012全景，竪坑断面層序，羨門閉塞状態

図版35　ＳＴ－4013羨門閉塞状態，ＳＴ－4011と周辺の遺物出土状態

図版36　ＳＫ－104断面，全景，ＳＫ－107全景，ＳＫ－108・109全景

図版37　ＳＫ－110断面層序，全景

図版38　ＳＺ－04断面層序，ＳＺ－09断面層序，ＳＺ－10断面層序，ＳＺ－15全景

図版39　ＳＺ－11全景，西端部遺物出土状態，土壌分析の状況

図版40　ＳＺ－13とＳＴ－4006，断面層序，ＳＺ－13上層断面層序

図版41　地主原Ａ地区全景，ＳＢ－01，ＰＰ－243，ＰＰ－309・310断面

図版42　地主原Ａ地区全景，ＳＤ－01・ＳＺ－04，小学生の体験学習

図版43　地主原Ｂ地区全景，溝状遺構北壁層序

図版44　試掘溝Ｃ１拡張区西側土器群，蕨Ｃ地区出土須恵器，中世国産陶器

図版45　試掘溝Ａ拡張区ＳＤ－24出土唐津焼徳利，蕨Ｃ地区ＳＤ－41出土常滑焼甕，ＳＴ－3016竪坑埋土出土近世陶磁器，久見迫Ｂ地区ＳＫ－104出土土師器，久見迫Ｂ地区出土縄文土器，弥生土器

図版46　久見迫Ｂ地区出土須恵器，ＳＴ－4011竪坑西側土器群土師器，須恵器

図版47　ＳＴ－4012竪坑埋土出土土師器，ＳＺ－10出土墨書土器，久見迫Ｂ地区出土中世国産陶器備前焼摺鉢

図版48　久見迫Ｂ地区ＳＺ－11出土土師器，中世国産陶器，ＳＺ－13出土近世国産陶磁器

図版49　調査区出土14～15世紀の輸入陶磁器青磁，15～16世紀の輸入陶磁器青磁，16世紀の輸入陶磁器染付

図版50　久見迫Ｂ地区出土16世紀末～17世紀前半の国産陶磁器，17世紀の国産陶磁器，試掘溝Ｉ１出土17世紀の徳利

図版51　久見迫Ｂ地区出土17世紀の国産陶磁器，17世紀後半～18世紀前半の国産陶磁器，18世紀の国産陶磁器，18世紀後半～19世紀の国産陶磁器

図版52　久見迫Ｂ地区出土18世紀後半～19世紀後半の国産陶器，磁器，19世紀の国産陶磁器，ＳＺ－11出土国産磁器，陶器

図版53　地主原Ａ地区出土輸入陶磁器青磁，17世紀～18世紀前半の国産陶磁器，18世紀以降の国産磁器，18～19世紀の国産陶器

図版54　地主原Ａ地区出土19世紀後半の国産陶器，ＳＡ－01出土磁器碗，ガラス瓶，久見迫Ｂ地区出土砥石，軽石加工品

図版55　ＳＴ－3009・3013・3014・3016・3020出土遺物

図版56　ＳＴ－3018・4001出土遺物

図版57　ＳＴ－4002・4003・4004出土遺物

図版58　ＳＴ－4005・4006出土遺物

図版59　ＳＴ－4008・4010・4011出土遺物

図版60　地下式横穴墓出土　刀剣，久見迫Ｂ地区ＳＫ－107出土遺物，ＳＫ－110出土遺物

図版61　久見迫Ｂ地区中世以降の遺構出土鉄製品，地主原Ａ地区出土鉄製品

表　目　次

表１　試掘溝Ｃ１拡張区・Ｄ１拡張区出土弥生土器・土師器観察表……22
表２　蕨Ｃ地区地下式横穴墓一覧表……84
表３　久見迫Ｂ地区地下式横穴墓一覧表……84
表４　蕨Ｃ地区地下式横穴墓出土遺物一覧表……84
表５　久見迫Ｂ地区地下式横穴墓出土遺物一覧表……85
表６　ＳＴ－4011西側土器群　観察表……86
表７　ＳＫ－104出土遺物一覧表 ……86
表８　調査区出土須恵器観察表……86
表９　調査区出土中世国産陶器観察表……86
表10　久見迫Ｂ地区出土土師器観察表……87
表11　調査区出土輸入陶磁器観察表……88
表12　調査区出土国産陶磁器観察表（１）……89
表13　調査区出土国産陶磁器観察表（２）……90
表14　試掘溝Ｋ１・久見迫Ｂ地区出土砥石一覧……90
表15　久見迫Ｂ地区出土軽石加工品・石臼一覧……91
表16　久見迫Ｂ地区出土金属製品一覧……91
表17　地主原Ａ地区出土遺物一覧……91

小木原遺跡群の調査

Ⅰ．はじめに

昭和63年度圃場整備事業は、本市大字上江字蕨・久見迫・地主原・宮原地内300,000㎡に計画された。当該地域は小木原地下式横穴墓群の分布域であり、昭和62年度蕨地区の調査において古墳時代の墳墓群を検出しているため、関係機関と協議を重ね、試掘調査と本調査を繰り返して実施した。

試掘調査には、昭和63年８月９日～13日、９月７日～10月６日、さらには同月21日～11月１日を充て、本調査を９月29日～10月20日および11月14日～平成元年２月２日に実施した。出土遺物の整理作業は３月31日まで継続し、平成５年４月22日～８月31日、平成６年10月７日～同月19日、平成７年１月５日～３月31日、７月３日～10月13日にかけて実施し、一連の作業を完了した。

Ⅱ．試掘調査

１．はじめに

調査は休耕地に限られたが、微高地のＣ～Ｄ付近とＪ付近を中心に設けた（第１図）。

２．基本的層序

層序は上からⅠ層：表土（耕作土）、Ⅱ層：床土・客土、Ⅲ層：黒灰～黒色土（火山灰）、Ⅳ層：黄～黄褐色微砂質土（アカホヤ火山灰）、Ⅴ層：暗茶褐色ハードローム（黒灰色土が斑状に混入）、Ⅵ層：暗灰～淡黒灰色土（火山灰）、Ⅶ層：淡黄褐色～淡茶褐色土、Ⅷ層：砂礫層に分別した。

Ⅷ層は約15,000年前の段丘堆積物で、約４ｍの厚さがある。下層にはシラス（入戸火砕流）が堆積している。市内の低・中位段丘は上記の基本的層序を形成している。

Ⅷ層は数10ｍ単位で凹凸を繰り返し、浅い谷が幾筋も入っている。以後Ⅲ層までは均一した厚さで堆積するため、自然と微高地が出来上がる。古代・中世には、この微高地を居住地としている。

３．試掘溝の調査（図版１）

試掘溝Ａ　溝状遺構を確認したため、重機で拡張した。その結果、重複する東西方向の溝（ＳＤ－24）と南北方向の溝（ＳＤ－21～23）を検出した。ＳＤ－21は幅11.6ｍ、深さ0.9ｍを測り、埋土から土師器の細片が１点出土している。ＳＤ－24は現在の用水路とほぼ並行する、幅１～２ｍの水路で、埋没後、幅・深さ50cmの水路が掘削されている。埋土から、近世末～近代の陶磁器が出土している（第２図，65図－１．２）

試掘溝Ｂ～Ｅ　中世の土器片や柱穴・溝状遺構を検出した。

試掘溝Ｆ　直径25～35cmの柱穴約20基を検出した。埋土から、須恵器片と土師器片が若干出土している。

試掘溝Ｇ・Ｉ・Ｊ　近世～近代の遺物を含む多数の柱穴や溝を検出した。

試掘溝Ｈ　すでに天井が陥没した地下式横穴墓（ＳＴ－4011）と、その玄室部に重複する円形の土壙墓を検出、竪坑の西側では須恵器と土師器の破片がみられた。詳細は、久見迫Ｂ地区の中で記述する。

Ⅲ．発掘調査

１．試掘溝Ｃ１拡張区（第３・６図、図版２）

施工上削平される部分において、調査を実施した。

Ⅰ・Ⅱ層を剝ぐと、東半分はⅣ層が露出した。遺構面は西に傾斜し、溝状遺構６条と土坑３基、掘立柱建物跡１棟、柱穴50基余りを検出した。ＳＤ－26は幅50～80cm、深さ20cm内外の溝で、17世紀代の陶磁器が出土している。当溝の80cm南には、並行する溝ＳＤ－27が走り、畦畔と水路を構成している。ＳＤ－30と25は東西に彎曲する溝で、15～16世紀を想定している。ＳＢ－01は２間×３間（4.3×6.4ｍ）の建物である。柱穴の直径は40cm内外であるが、深さは一様ではない。年代決定できる遺物は出土していないが、13～14世紀と思われる。

調査区の西側のⅢ層内には、弥生中期末～中世の遺物が散在していた。調査区の西側にも当該期の遺構が埋蔵している可能性がある。

２．試掘溝Ｄ１拡張区（第４～６図，図版３）

試掘溝Ｃ１拡張区の南側、試掘溝Ｄ１周辺を拡張した調査区で、前者とは様相が異なる。柱穴は皆無で、土坑２基と溝状遺構４条を検出した。

ＳＫ－103は、長軸1.40ｍ、短軸1.03ｍ、深さ0.60ｍで楕円形を呈し、底面にはアカホヤ塊があるものの、出土遺物は無い。構造的には木蓋土壙墓と思われる（第５図）。

溝状遺構は、すべて砂が大量に流れ込んでおり、充分に機能している。ＳＤ－31・34は直線的で、特に後者は幅2.1ｍ、深さ0.94ｍの大溝で、土師器や陶器・鉄鏃などが出土した。ＳＤ－32・33はこれ以前に掘削された溝で、彎

曲していることから、旧地形もしくは旧地割に沿っていたものと思われる。

3．蕨C地区

昭和62年度に発掘調査した蕨A・B地区とは県道を挟んでいるだけであり、西南から延びてくる谷までは墳墓群が存在すると考え、1～3区に小区分して表土剝ぎを行なった。その際、5～6基の地下式横穴墓の玄室が、重機の重みによって陥没した。その他の墳墓は、すでに天井が陥没して黒土で充眞していた。

調査は、施工による削平深度によって、1区を全面調査、2区は地下式横穴墓のほか必要最低限とし、3区は重機による天井の破壊の有無を確認することとした。なお0区は、調査終了間近に県文化課の指導を受けて拡張調査（分布の確認のみ）をした地区である。

検出した遺構は、地下式横穴墓22基＋α、溝状遺構20条＋α、土坑4基、pit約10基を検出した。

古墳時代の遺構と遺物

調査区では地下式横穴墓22基（ＳＴ－3001～3022）を検出したが、＋20基程度の未確認墓があったと思っている。うち1区においては完全な分布状況を把握している。

ＳＴ－３００１～３００６（図版７）

未調査であるが、竪坑の規模と形態で構造が推定できる。ＳＴ－3003と3004は羨門閉塞のタイプで、墳丘を共有していたと思われる。残りの4基は竪坑上部閉塞のタイプであると思われる。

ＳＴ－３００７（第12図，図版９）

検出時は、玄室天井が崩落して黒色土が埋まっている状況であった。実際は玄室内埋土を除去していっても、天井が崩落した状況ではなく、黒色系の土だけが埋まっていた。当初追葬坑と考えていた竪坑の1・2層も、玄室が埋まって後の掘り込みであり、且つ、青磁片が1点出土していた。羨門部西側には、閉塞材をはめ込むためと考えられる掘り込みがある。竪坑は不整長方形で、2段掘り、短辺に羨門があり、長さ1.54m、幅0.8m、深さ0.6mを測る。羨道は幅0.3m、玄室は台形で、奥行き1.26m、奥壁の幅1.18m、羨門側の幅1.66mを測る。

ＳＴ－３００８（第13図，図版10）

玄室は県道下にあり、未調査である。竪坑は、不整形で南半部は溝状遺構（ＳＤ－41）に削られている。2層には大量の礫と陶磁器片が混入していた。羨門には閉塞材が見られず、板閉塞と思われる。

ＳＴ－３００９（第14図，図版11）

竪坑上部閉塞の平入り楕円形タイプである。竪坑の北側から玄室にかけて崩落し、閉塞石は全て落ち込んでいた。竪坑底面の幅は0.37m、玄室の奥行きは1.52m、幅1.96mである。玄室の左側に小刀の破片と木質の鞘片（第29図－25,26）が遺存していた。

ＳＴ－３０１０（第15図，図版12）

竪坑は隅丸長方形で、長さ1.64m、幅1.0m、深さ0.85mを測り、短軸に羨門を持つ。玄室は平入り隅丸台形を呈し、奥行きは1.30m、奥壁の幅は1.30m、羨門側の幅は1.80m、最大幅は1.94mを測る。閉塞には、板石3枚を使用している。

断面から判断すると追葬は無い。副葬品も無い。

ＳＴ－３０１１（第16図）

玄室は県道下にあることから、竪坑のみの調査となった。竪坑プランは一辺60cmの方形を呈し、北辺に傾斜が付く。深さは1.10mであり、底面に閉塞石の一部が崩落していた。羨道の中位まで黒色土が流入している。

ＳＴ－３０１２（第17図，図版13）

ＳＴ-3011の東に位置し、竪坑の南縁と閉塞石を確認した。北壁断面のA層（遺構面の黒色土と竪坑・玄室掘削排土が混ざった土層）は、幅5mにわたり、遺構面から10～15cm掘り凹めた上に被覆している。このA層によって竪坑の位置は不明瞭となり、埋葬（追葬）終了状況を表していることが推定される。且つ、直径5m・厚さ15cm程度と仮定すると、竪坑・玄室の掘削排土量と同量になり、墳丘を持つことが許されなかった階級の墳墓かもしれない。

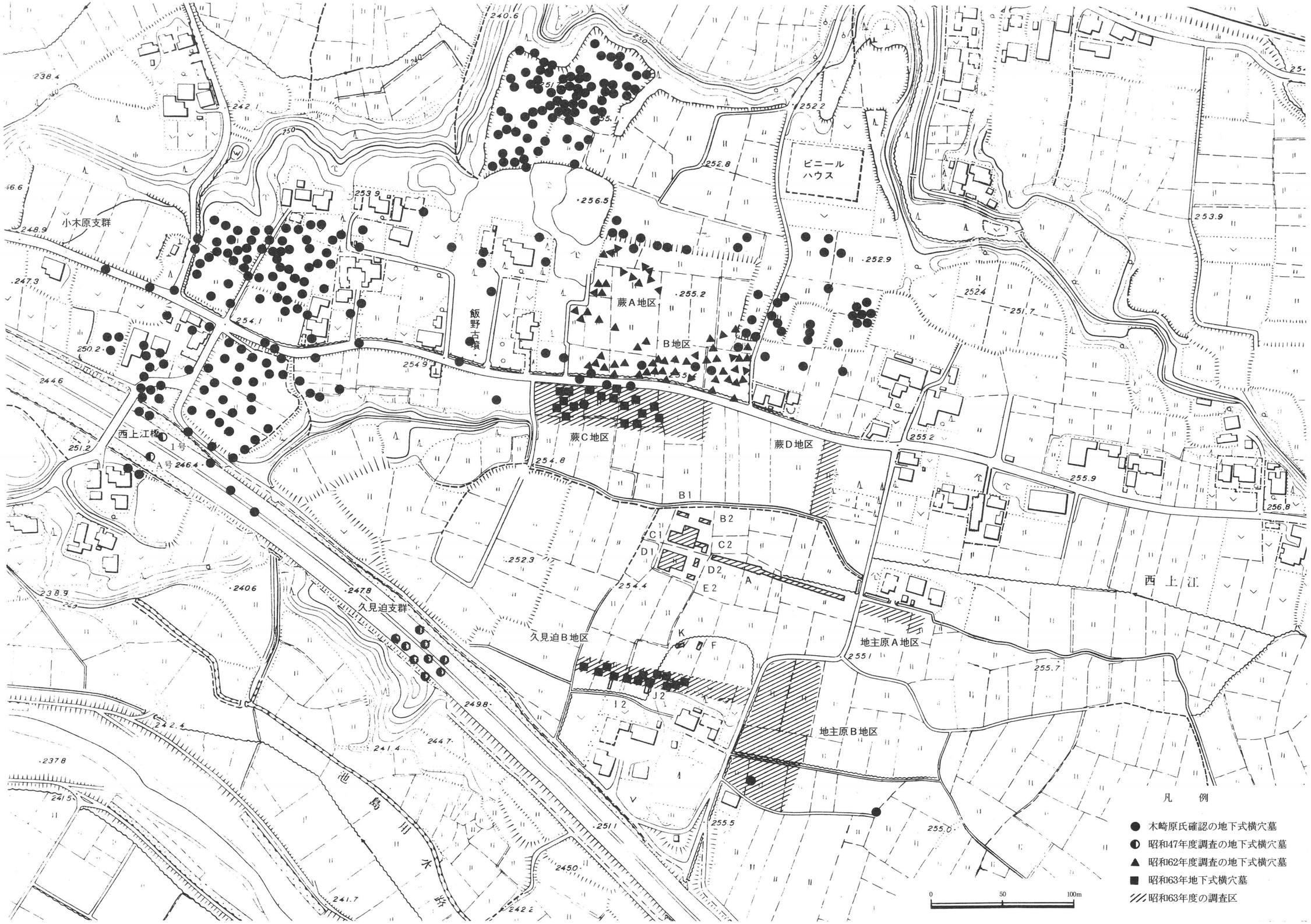
ＳＴ－３０１３（第18図，図版11）

主軸が北寄りの、竪坑上部閉塞・平入り楕円形タイプである。竪坑は2段掘りで、2段目は長さ0.58m、幅0.40mの長方形で、深さ1.30mである。羨道は短く、玄室の奥行きは1.20m、幅2.0m、高さ0.80mを測る。

玄室の左奥には、片刃長頸鏃1本と圭頭鏃1・刀子1・種類不明1の4点（第29図－1～4）が、中央羨門側には赤色顔料の散布がみられた。

ＳＴ－３０１４（第19図，図版14）

羨門から玄室にかけて崩落していた。竪坑上部閉塞・平入り楕円形タイプで、竪坑の1段目と閉塞石は削失していた。竪坑は0.4m四方と小さく、深さは0.90mを測る。玄室の床面は竪坑よりも10cmほど高く、奥行き1.46m、幅2.16mを測る。



第１図　試掘溝および発掘坑位置図（1:2500）

玄室の奥側には刀１振と長頸鏃７、鉇１が、手前には刀１振と圭頭鏃２、腸抉柳葉鏃１がある（第29図－５～16，第50図－129,131）。鉇は、位置的には奥側の一括に含まれる可能性が高い。129は長さ46.8cm、131は70cmである。

ＳＴ－３０１５（第20図，図版14）

主軸が北寄りの、竪坑上部閉塞・平入り楕円形タイプである。竪坑は２段掘りで、１段目は１辺1.20mの隅丸方形、２段目は長さ0.60m、幅0.4～0.5mの略長方形を呈し、深さは1.20mである。竪坑上部は、細長い板石３板と拳～人頭大の礫で閉塞している。

玄室は奥行き1.50m、幅2.26m、高さ1.02mを測り、床面は竪坑底面よりも最大0.4m低い。人骨や副葬品は皆無である。なお、西に接する土層観察用土手で、礫混じりの掘削排土を検出している（第25図）。

ＳＴ－３０１６（第21図，図版15）

羨道から玄室にかけては崩落していた。主軸は北寄り、平入り楕円形タイプである。

竪坑は２段掘りで、１段目は長さ約1.6m、幅1.14mの長方形、２段目は幅0.44mで、深さは1～1.1mを測る。竪坑上部は細長い板石４枚で閉塞されている。

玄室の奥行きは1.20m、幅1.90mを測り、奥壁寄りに被葬者の頭骨と下肢骨、副葬品が遺存していた。副葬品は刀１振のほか鉄鉾１、柳葉鏃１、腸抉柳葉鏃５が一括して頭骨の後方に置いてあった（第29図－17～20，第50図－130）。大刀の現存長は44cmである。

ＳＴ－３０１７（第22図，図版16）

主軸を北北東に向けた、羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。竪坑は長さ1.80m、幅1.05mの隅丸長方形で深さは0.80mを測る。玄室は崩落していた。

羨門から玄室に向かって緩やかに下向し、玄室床面と竪坑底面は0.34mの差がある。羨門は、長軸0.25～0.35mの板石と拳大の礫で閉塞している。

玄室の奥行きは0.97m、幅1.68mを測る。人骨や副葬品は皆無である。

ＳＴ－３０１８（第23図，図版17）

主軸が北寄りの、竪坑上部閉塞・平入り楕円形タイプである。竪坑は２段掘りで、１段目の北半部は後世の溝状掘削の際に削平されている。１段目は１辺1.1～1.4mの長方形、２段目は長さ0.5～0.6m、幅0.4mの長方形を呈し、深さは1.18mを測る。竪坑上部は、５枚の板石を花弁状に重ねて中央に拳大の礫を４個置いて閉塞している。

玄室の主軸は竪坑よりも西へ傾き、奥行きは1.14m、幅1.58m、高さ0.72mを測る。天井はドーム型である。右中央部には小剣１振と圭頭鏃１、腸抉柳葉鏃１、長頸鏃３が副葬されていた（第29図－21～24）。

ＳＴ－３０１９（第24図，図版18）

主軸が北向きの、竪坑上部閉塞・平入り楕円形タイプである。竪坑１段目を含む上位は後世に削平され、天井崩落以前にすでに半分近くまで土が流入している。現存する竪坑の深さは1.0m、底面の幅は0.54mである。玄室の奥行きは1.20m、幅1.57mを測る。天井は、屋根型に近いドーム型と推定される。

人骨および副葬品は皆無である。

ＳＴ－３０２０（第25図，図版19）

主軸が北東向きの、竪坑上部閉塞・平入り楕円形タイプである。竪坑は２段掘りで、１段目は長さ約1.40m、幅1.15mで、２段目は幅0.45m、深さ1.10mである。

羨道から玄室にかけては崩落・埋没し、竪坑の東隅は後世の溝状遺構掘削の際に削失している。竪坑の上部には板石１枚と礫が残っていた。

玄室は羨道よりの一段（10cm）下がり、奥行き1.20m、幅1.90mを測る。人骨は遺存していなかったが、玄室と羨道の境のあたりに刀子１点（第29図－27）が出土した。位置的には、移動している可能性が高い。

ＳＴ－３０２１

未掘であるが、位置と形状から地下式横穴墓とした。

ＳＴ－３０２２（第26図，図版17）

２区東壁沿いを調査した際に検出した。

主軸は北寄りで、竪坑上部閉塞・平入り楕円形タイプである。竪坑は２段掘りで、１段目は１辺1.2～1.3mの隅丸方形、２段目は幅0.6m、長さ0.8m、深さ1.24mを測る。１段目上半部と閉塞石は削失している。

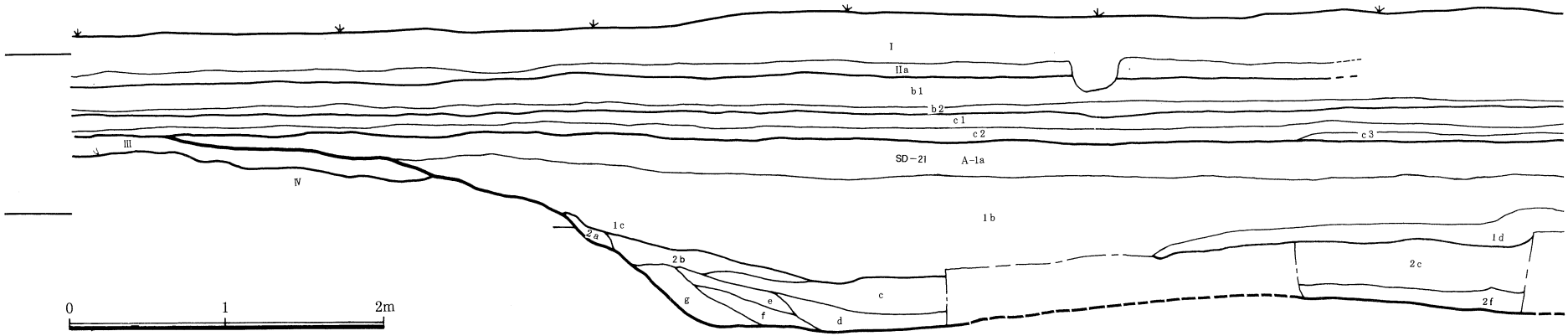
玄室の底面はフラットではなく、天井も凹凸が著しい。奥行きは0.92m、幅1.38m、高さ0.84～0.54mと小型である。人骨および副葬品は皆無である。

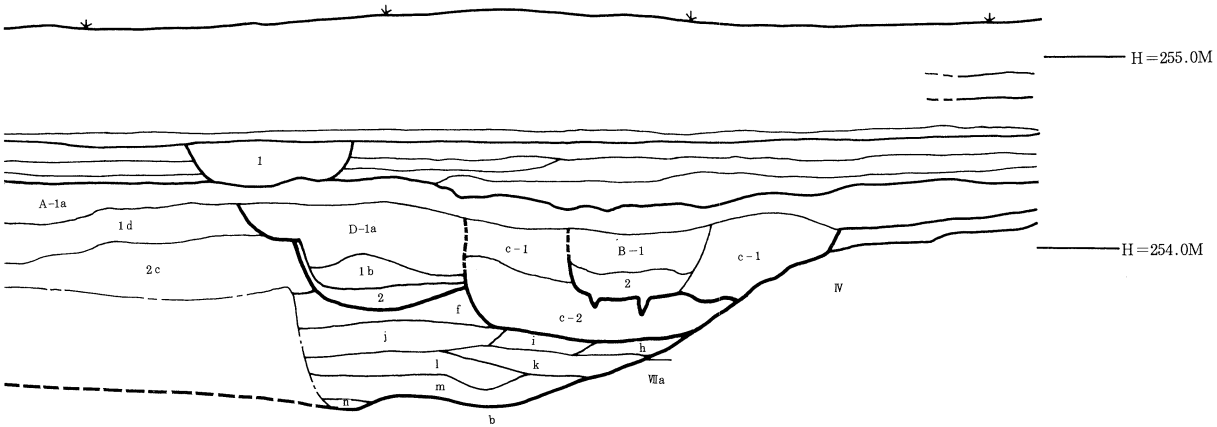
その他

蕨Ｃ－２区の北壁沿いには礫混じりの黒土が３ヶ所あり（第９図の網目）、ＳＴ－３０１２と同様、この地層を掘り下げれば竪坑が検出できたと思われる。

古代～近世の遺構と遺物

墳墓以外の遺構は、ほとんどが耕地化に伴う溝状遺構である。



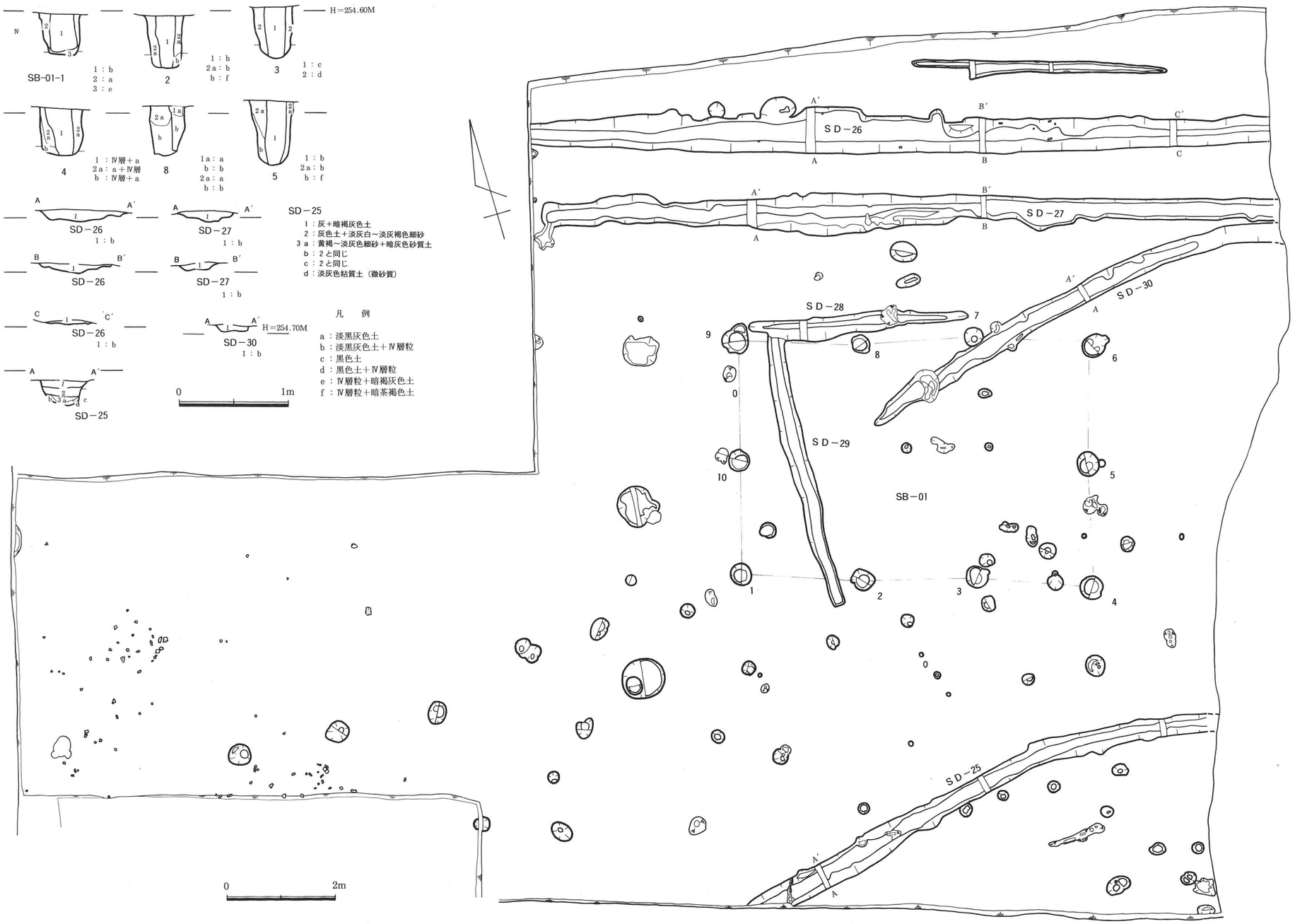


I　：暗灰色土（水田耕作土）
IIa　：暗灰褐色粘質土（床土）
b1：暗灰色土（混砂礫、旧耕作土）
b2：灰～暗灰色粘質土（旧床土）
c1：暗灰色土（旧耕作土）
c2：暗灰色粘質土（旧床土）
c3：暗灰色土（やや粘質）
SD−21　A−1a：黒灰～黒褐色微砂質土（粘質）
b：暗灰色土（粘質、軟質）
c：暗灰～淡黒灰色微砂質土
d：淡黒灰色微砂質土
2a：灰＋淡褐灰色微砂質土
b：暗灰～淡黒灰色土（粘質）
c：暗灰～淡黒灰色微砂質土
d：暗灰褐色微砂質土（粘質）
e：暗灰色微砂質土（粘質）
f：淡黒灰色微砂質土（粘質）
g：暗灰色微砂質土（粘質）
h：暗灰～淡黒灰色土（粘質）
i：淡黒灰色土（粘質）
j：暗灰色土（粘質）
k：暗灰色微砂質土（粘質）
l：暗灰～暗灰褐色微砂質土（粘質）
m：灰色微砂質土＋黄橙色粘質微砂
n：淡黒灰色微砂質土（粘質）

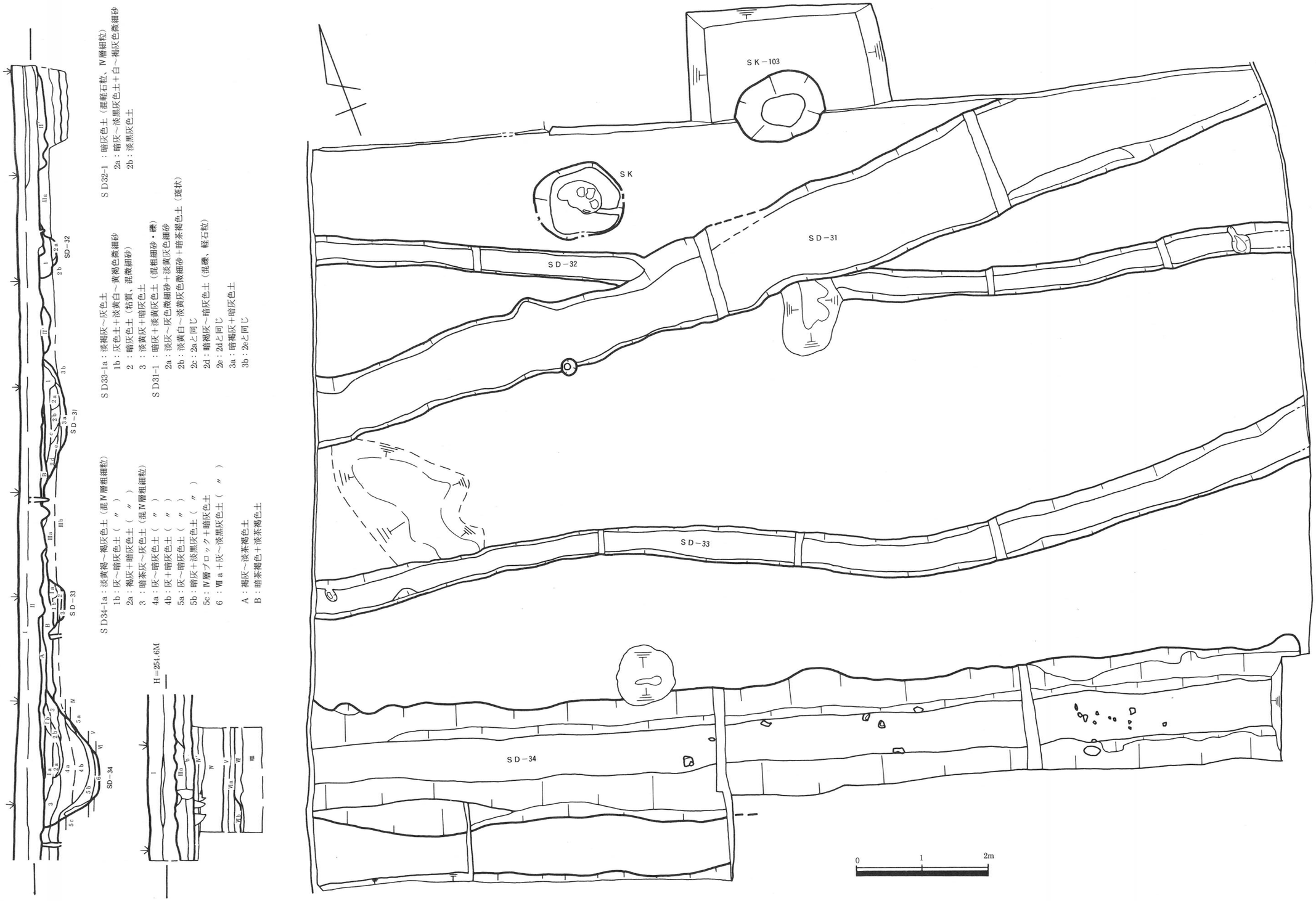
SD−21　B−1：暗茶灰＋淡灰色微砂質土
2：暗茶灰色微砂質土（上面に酸化鉄沈積）
C−1：暗灰色土（粘質）
2：暗灰色微砂質土
D−1a：暗灰色微砂質土（粘質）
1b：暗灰褐色粘質土
2：暗茶褐色微砂質土

III：黒灰色土
IV：アカホヤ火山灰
VIIa：淡柴白～淡灰白色粘質微砂
b：橙黄色粘質微砂～粘質土

第2図　試掘溝A拡張区SD−21　層序図



第３図　試掘溝Ｃ１拡張区　遺構実測図



SD34-1a：淡黄褐～褐灰色土（混Ⅳ層粗細粒）
1b：灰～暗灰色土（〃）
2a：褐灰＋暗灰色土（〃）
3：暗茶灰～灰色土（混Ⅳ層粗細粒）
4a：灰～暗灰色土（〃）
4b：灰＋暗灰色土（〃）
5a：灰～暗灰色土（〃）
5b：暗灰＋淡黒灰色土（〃）
5c：Ⅳ層ブロック＋暗灰色土
6：Ⅶa＋灰～淡黒灰色土（〃）

A：褐灰～淡茶褐色土
B：暗茶褐色＋淡茶褐色土

SD33-1a：淡褐灰～灰色土
1b：灰色土＋淡黄白～黄褐色微細砂
2：暗灰色土（粘質、混微細砂）
3：淡黄灰＋暗灰色土

SD31-1：暗灰＋淡黄灰色土（混粗細砂・礫）
2a：淡灰～灰色微細砂＋淡黄灰色細砂
2b：淡黄白～淡黄灰色微細砂＋暗茶褐色土（斑状）
2c：2aと同じ
2d：暗褐灰～暗灰色土（混礫、軽石粒）
2e：2dと同じ
3a：暗褐灰＋暗灰色土
3b：2eと同じ

SD32-1：暗灰色土（混軽石粒、Ⅳ層細粒）
2a：暗灰～淡黒灰色土＋白～褐灰色微細砂
2b：淡黒灰色土

第４図　試掘溝Ｄ１拡張区　遺構実測図、西壁層序図

調査区の北側には、県道（通称「山麓線」）に沿って１条の溝状遺構（ＳＤ－41）を検出した。

直線的ではないものも溝状遺構としたが、幅も広く、機能が異なると思われる。

ＳＤ－４１

正確な幅が計測できるのは１区と２区の境、２区と３区の境の土層観察用土手の断面層序図（第10・11図）であるが、状況は異なる。

第10図では、現状では上面の幅は3.60m、深さ0.35～0.40mである。上面は後世の開墾で削られ、原況を復原すると幅4.6m以上となる。底面は幅1.70mを測り、直径５cm前後の礫が全面に敷かれたような状況で、しかも酸化鉄が沈積して、硬化していた。埋土に砂粒は含んでいない。

第11図を見ると、ＳＤ－41構築以前に畦畔や溝状遺構が存在する。平安時代～中世にかけて墓域は生産の場へと変わる。先ず畦畔（ＳＲ－05）が削り出され、ＳＤ－51が掘削された。埋没後、畦畔（ＳＲ－04）が築かれ、ＳＲ－05との間に溝（ＳＤ－49）ができた。これらが埋没（ＳＲ－03）すると、ＳＤ－41と50が掘削された（幅4.9m）。ＳＤ－50以外の底面には礫が敷かれた状況で、酸化鉄が沈積した硬化面となっている。よってＳＤ－41は石敷道路と推定する。ただ、ＳＤ－50の北側は、南側よりも10cmレベルが高く、硬化も弱い。

出土遺物は少ないが、底面から常滑焼の甕（第61図－１）が、上層からは青磁片が出土しており、戦国期の道路であったと推定される。

ＳＤ－４３（第27図）

北はＳＤ－41と継がり、南東へ５m延びた所で南に掘折する。幅は一定ではなく0.3m～0.1m、掘折部から北の底面は２列の階段掘りで、石敷道路に向かって徐々に下降している。形状からみると、道路に通じる小路と考えられる。なお、ＳＤ－41との切り合いは無いと判断した。出土遺物は皆無である。

ＳＺ－０２（第８図）

１辺が4.6～5.8mの不整長方形で、0.4m程度の掘り込みがある。機能は不明である。

ＳＤ－４０（第８図）

２ヶ所で屈折する、幅1.1～３mの溝状遺構で、10～25cmの凹凸の掘り込みがある。埋土から、土師器の細片が３点出土した。

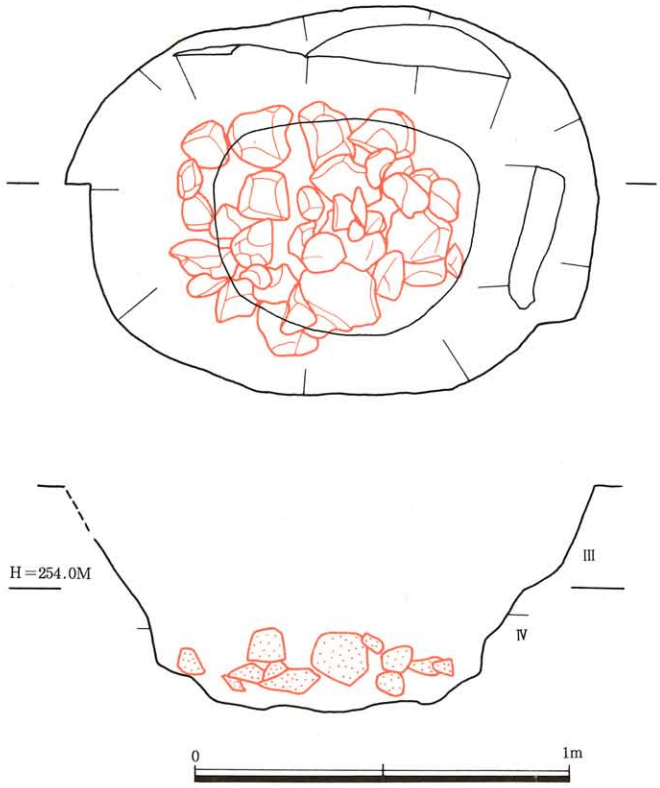
ＳＤ－３８（第８図，図版６）

ＳＴ－3020を囲む、幅1.6～５m、内径４～７m、外径９～14mの溝である。北東部は直角に張り出し（深さは５～10cm）、その南側は５～10cm低い。西には直径２～３m、深さ0.4mの落ち込みがある。南西部の幅は狭いが深さは0.3m前後である。南側はＳＤ－39と合流する。ＳＤ－39は幅1.2～2.6m、深さ0.25mである。

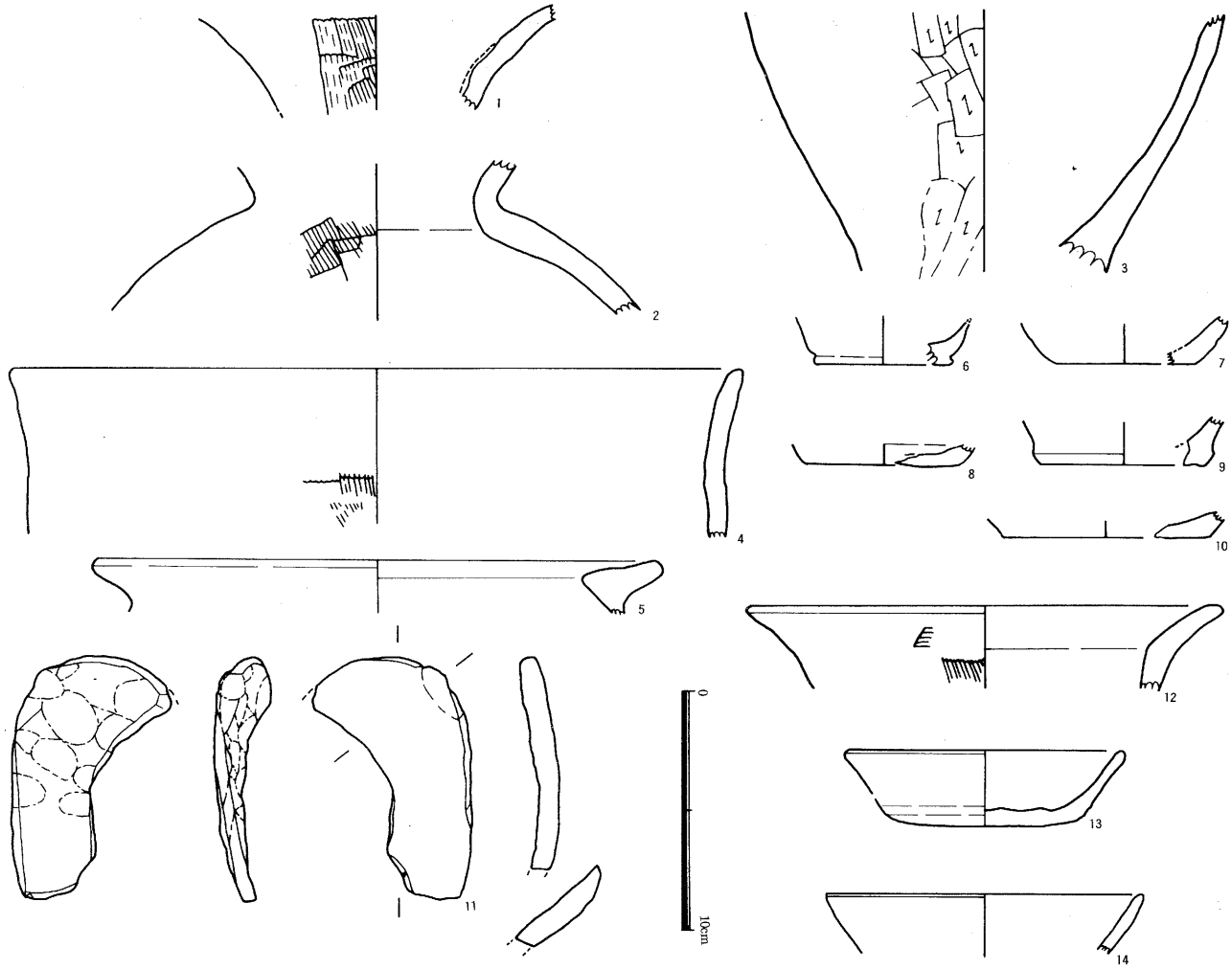
ＳＤ－40の埋土から土師器の細片と青磁片（14～15世紀）が、上面から薩摩焼の陶器片３点が出土しており、ＳＴ－3020の周溝ではないことは明らかである。

蕨Ｃ－２区東壁沿い

東壁沿い２mを掘り下げると、埋没遺構が検出された。南端部では落ち込み（ＳＺ－04）と須恵器（第64図－４・６）に加えてプラント・オパールも検出され、平安時代頃からすでに墓域から耕作地へ転化していった様子が伺える。



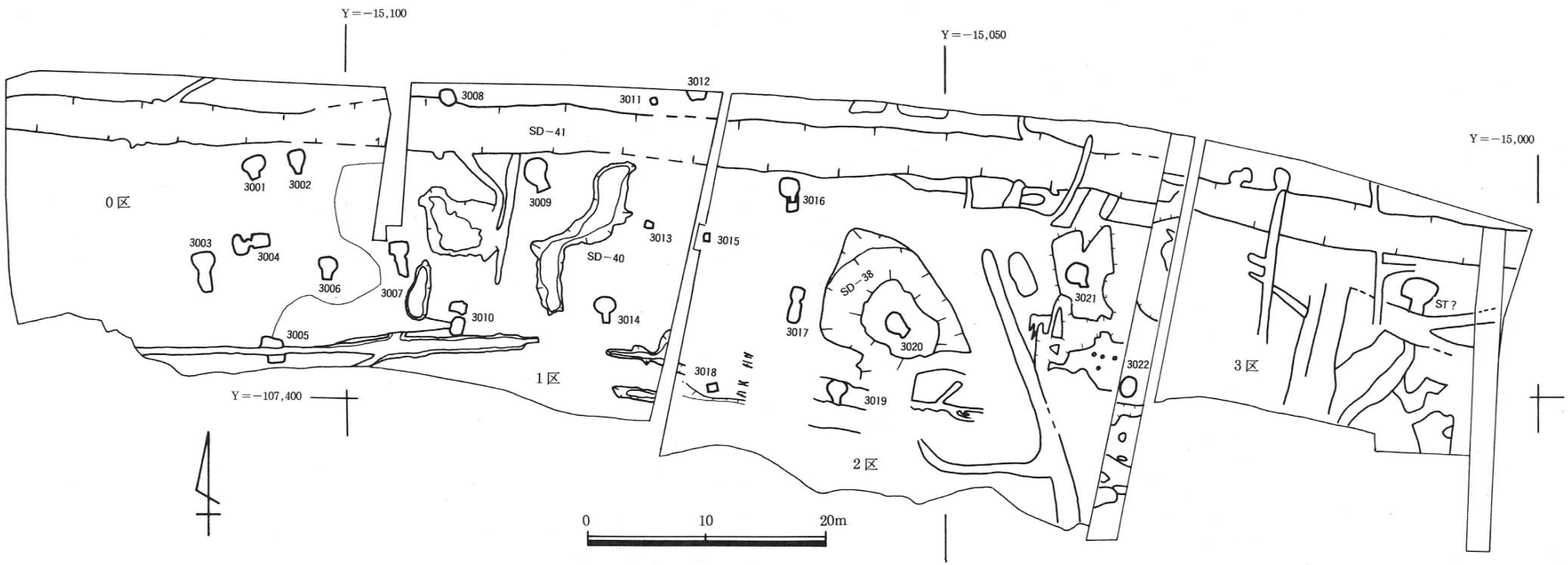
第５図　試掘溝ＤⅠ拡張区　ＳＫ－103　実測図



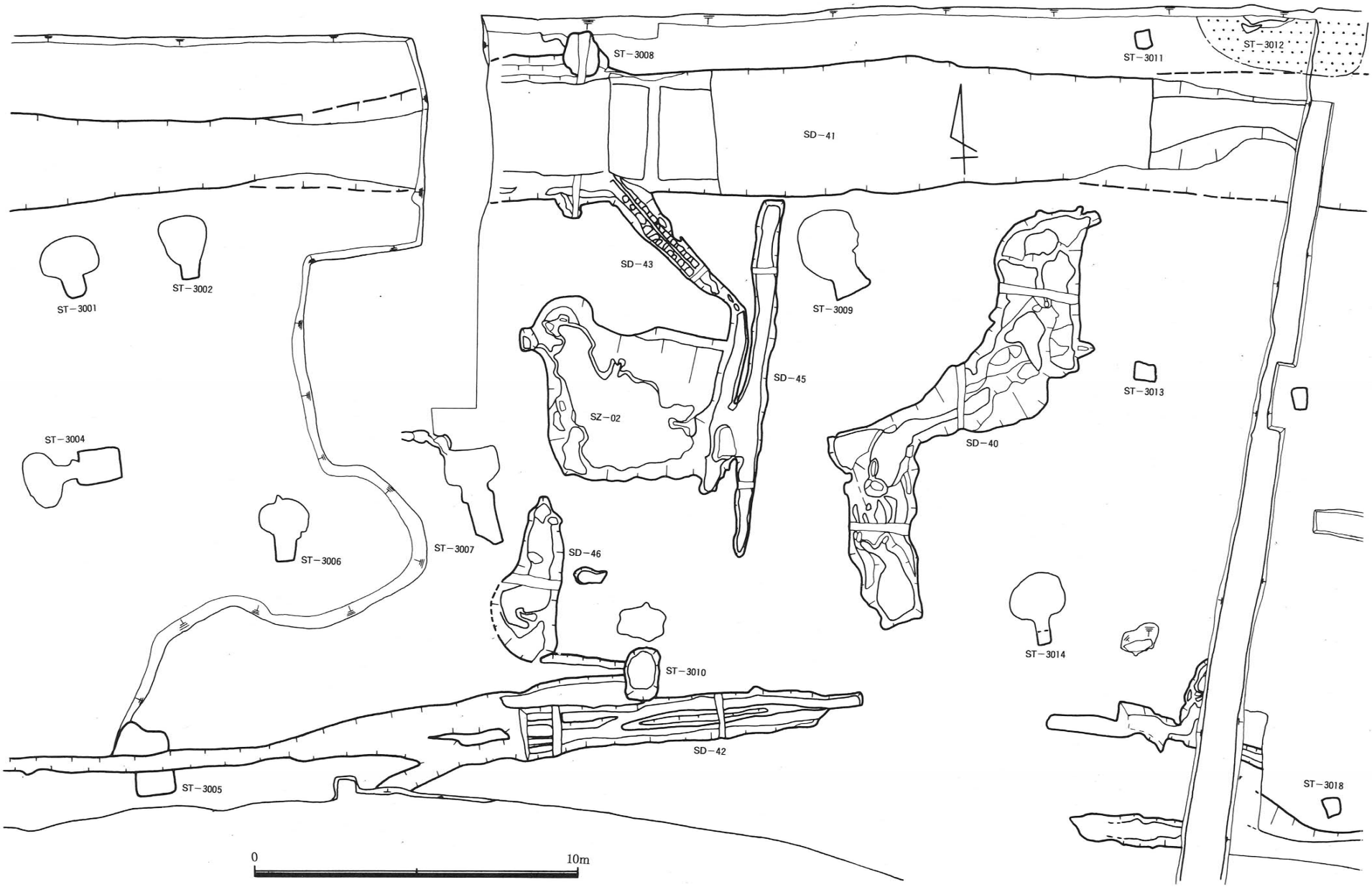
第６図　試掘溝Ｃ１拡張区・Ｄ１拡張区出土　土師器　実測図

表１　試掘溝Ｃ１拡張区・Ｄ１拡張区出土弥生土器・土師器観察表

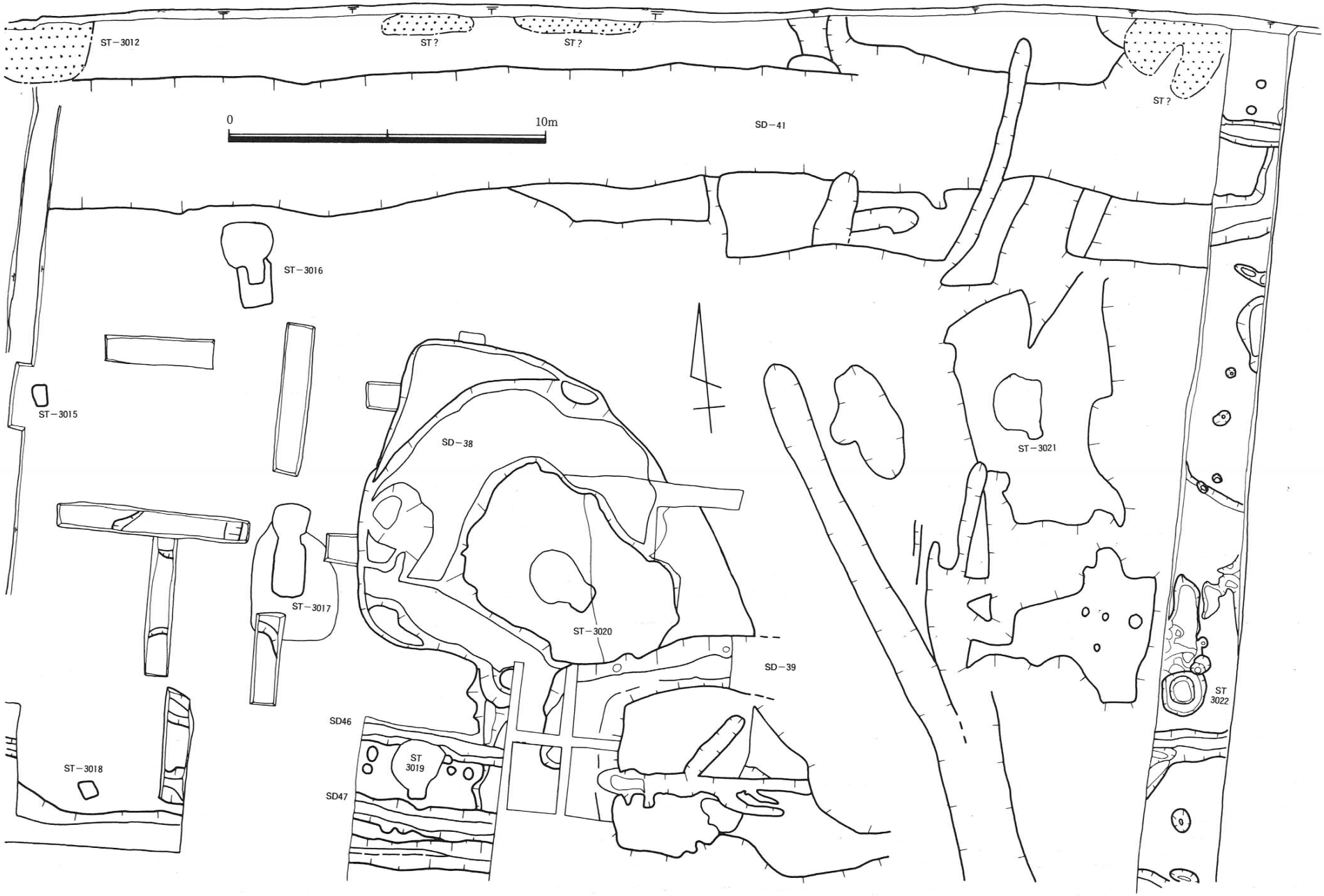
番号	出土地・遺構	器種	法量(cm) 口径	底径	高さ	調整 内面	外面	底部	色調 内面	外面	焼成	胎土
第6図 1	Ｃ１　土器群	壷	－	－	－	摩滅	ハケ	－	淡黄褐	淡茶褐	良	1～2ミリの砂粒・赤褐色粒少量
2	Ｃ１　土器群	壷	－	－	－	ナデ	ハケ	－	淡黄褐	黄褐	良	1～2ミリの砂粒 少量
3	Ｃ１　土器群	甕	－	－	－	ナデ	上半 ケズリ 下半 ナデ	－	淡茶褐	淡黄褐～淡茶褐	ややあまい	1～2ミリの砂粒 多量
4	Ｃ１　土器群	甕	30.2	－	－	ナデ	口縁 ナデ 胴 ハケ	－	淡黄褐	淡黄褐	あまい	1ミリ前後の砂粒 多量
5	Ｃ１　土器群	甕	11.6	－	－	ナデ	ナデ	－	淡黄褐	淡黄褐	良	1ミリ前後の砂粒 少量
6	Ｃ１　土器群	高台付皿	－	5.8	(1.9)	ナデ	ナデ	ヘラ切り	淡黄褐	淡黄褐	ややあまい	精　良
7	Ｃ１　土器群	椀	－	5.8	－	ナデ	ナデ	摩滅	淡黄白	淡灰褐	ややあまい	精　良
8	Ｃ１　土器群	坏	－	6.4	－	ナデ	ナデ	糸切り	淡黄白	淡黒灰	良	精　良
9	Ｃ１　土器群	椀	－	6.8	－	ナデ	ナデ	糸切り？	淡黄褐	淡黄褐	良	精　良
10	Ｃ１　土器群	坏	－	8.6	－	ナデ	ナデ	糸切り	淡黄褐	淡灰	良好	精　良
11	Ｃ１　土器群	土製品	－	－	－	指頭	指頭	－	黄褐	黄褐～暗黄褐	良	1ミリ前後の砂粒 多量
12	Ｄ１　撹乱坑	甕	19.8	－	－	ナデ ハケ？	ヨコハケ タテハケ	－	灰～暗灰	淡茶褐	ややあまい	1ミリ前後の砂粒・雲母 少量
13	Ｄ１　ＳＤ－34	坏	11.2	7.6	3.2	ナデ	ナデ	糸切り	淡黄白	淡黄白	良	精　良
14	Ｄ１　ＳＤ－34	坏	13.0	－	－	ナデ	ナデ	－	黄淡	黄褐	良	1～2ミリの砂粒 微量



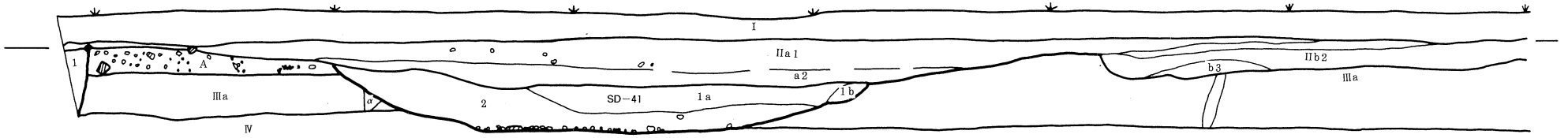
第７図　蕨Ｃ地区　遺構分布図



第８図　蕨Ｃ－０区東～１区　遺構分布図



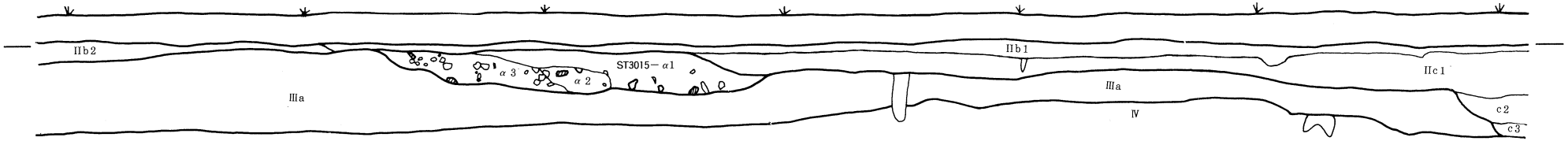
第９図　第Ｃ－２区　遺構分布図



1：暗茶灰～淡黒灰色土＋礫

A：ＳＴ－3012の排土

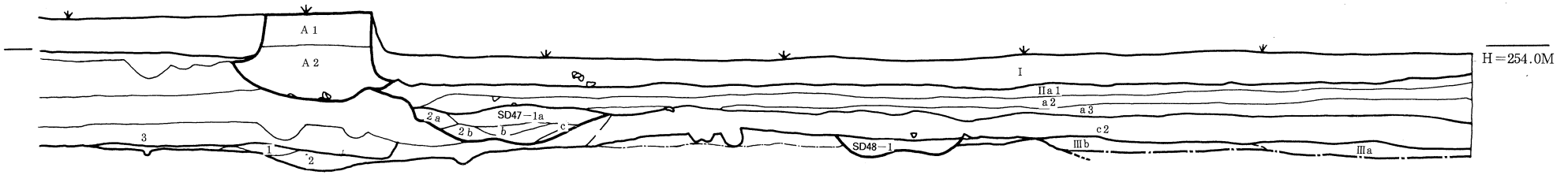
1a：暗灰色土
1b：暗灰色土＋黒灰色土
2：暗灰～淡黒灰色土、下底に礫敷



ST3015−α1：暗灰～淡黒灰色土＋礫
α2：淡黄灰～淡茶灰色土＋Ⅳ層ブロック＋礫
α3：淡黄灰～灰色土＋礫

IIIa：黒灰色土

Ⅳ：アカホヤ火山灰



A1：暗灰色土
A2：灰～暗灰色土

1：淡黒灰色土＋暗茶灰色土
2：淡黒灰色土
3：2と同じ

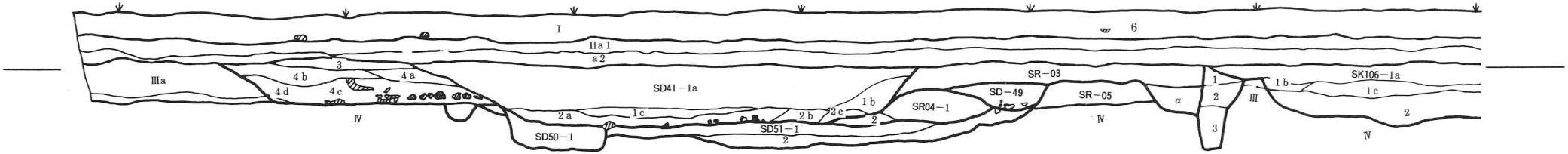
SD47−1a：灰色～暗灰色土
1b：暗灰色土＋淡灰白色土（稿状）
2a：1bと同じ
2b：淡黄白～淡灰白色粗～微砂＋灰～暗灰色土
2c：淡黄褐～淡黄白色微細砂

SD48−1：暗灰色土（砂質）

IIa1：暗茶灰色土
a2：暗茶灰～暗灰色土
b1：暗茶灰色土
b2：灰～暗灰色土＋淡茶褐色土
b3：暗灰色土＋暗茶褐色土
c1：暗灰～淡黒灰色土
c2：暗灰＋暗茶灰色土
c3：暗灰～淡黒灰色土

0　1　2m

第10図　蕨Ｃ－１区　東壁序実測図

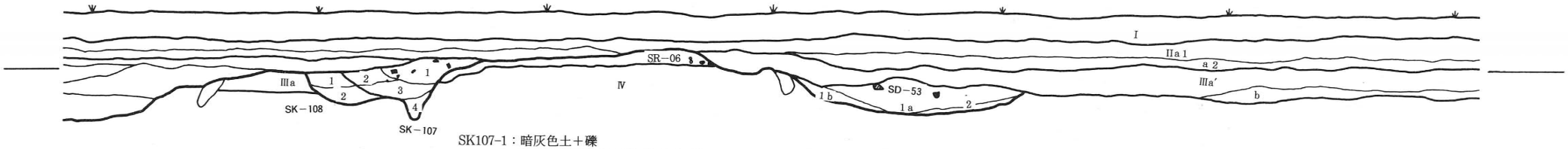


SD41-1a：暗灰色土
1b：淡黒灰色土（混粗砂）
1c：灰色土＋褐灰色土（混粗細砂）
2a：灰色～灰褐色微砂質土（混粗細砂、Ⅳ層粗粒）
2b：灰色土（混粗細砂）
2c：褐灰色微砂質土

3：暗灰～淡黒灰色土（混Ⅳ層細粒）
4a：淡黒灰色土＋Ⅳ層細粒
4b：暗灰～暗灰褐色砂質土＋淡黒灰色土
4c：暗灰色土（混粗細砂）
4d：暗灰色微砂質土（粘質）

SD50-1：暗灰＋淡黒灰色土＋Ⅳ層ブロック
SD51-1：淡黒灰色土＋Ⅳ層ブロック
2：Ⅳ層ブロック＋淡黒灰色土
SD-49：灰～暗灰色土
SR-03：灰～灰褐色土（混粗細砂）

α：暗灰＋淡黒灰色土
SR-04•05：淡黒灰色土（05は削り出し）
SK106-1a：灰色＋淡黒灰色土（混8 層粗細粒）
1b：淡褐灰色微砂＋灰色土
1c：淡褐灰＋淡黒灰色土（混8 層ブロック、粗細粒）
2：淡褐灰～淡黒灰色土（混8 層ブロック）

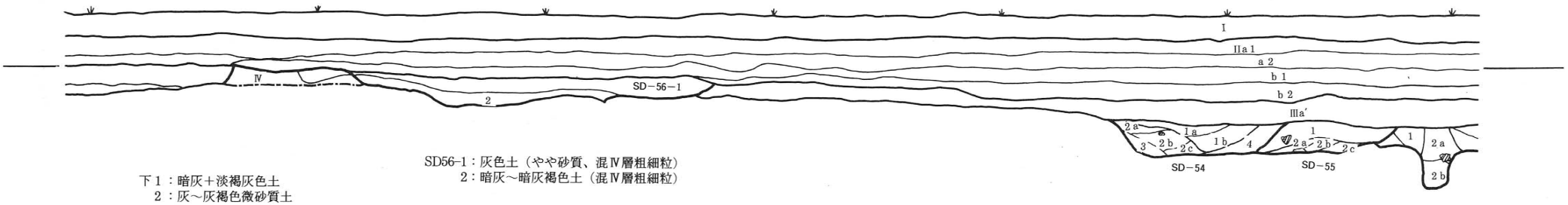


SK108-1：灰＋淡黒灰色土（混Ⅳ層微細粒）
2：灰～淡黒灰色土（混Ⅳ層微細粒）

SK107-1：暗灰色土＋礫
2：灰＋淡黒灰色土（混Ⅳ層粗細粒）
3：暗灰～暗灰褐色土（混粗砂、礫）
4：3同じ
SK-6　：暗灰～淡黒灰色土（混Ⅳ層細粒、礫）

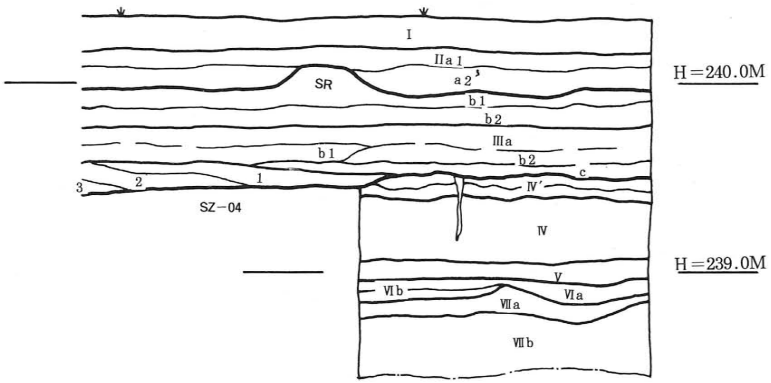
SD-53-1a：暗灰～淡黒灰色土（混Ⅳ層細粒）
1b：褐灰色微砂質土
2：Ⅳ層粗細粒＋暗灰～淡黒灰色土

上段1：暗灰色土（混Ⅳ層粗細粒）
2：暗灰色土＋Ⅳ層ブロック
3：淡黒灰色土（混Ⅳ層粗粒）



SD56-1：灰色土（やや砂質、混Ⅳ層粗細粒）
2：暗灰～暗灰褐色土（混Ⅳ層粗細粒）

下1：暗灰＋淡褐灰色土
2：灰～灰褐色微砂質土
3：灰～淡黒灰色土



I　：暗灰色土（現水田耕作土）
IIa1　：淡灰色土
a2　：灰色土（旧耕作土）
b1　：淡灰～灰色土
b2　：灰色土
IIIa　：暗灰色土
b1　：灰色土
b2　：暗灰～淡褐灰色土
c　：淡黒灰色土
IV′　：灰褐～淡茶灰色土（漸移層）
IV　：アカホヤ火山灰
V　：淡茶褐＋淡黒灰色粘質土（硬質、斑状）
VIa　：灰～淡茶灰色粘質土
b　：淡茶灰～淡黄灰色粘質土
VIIa　：淡黄灰色粘質土
b　：淡灰白～淡黄白色粗細砂＋礫

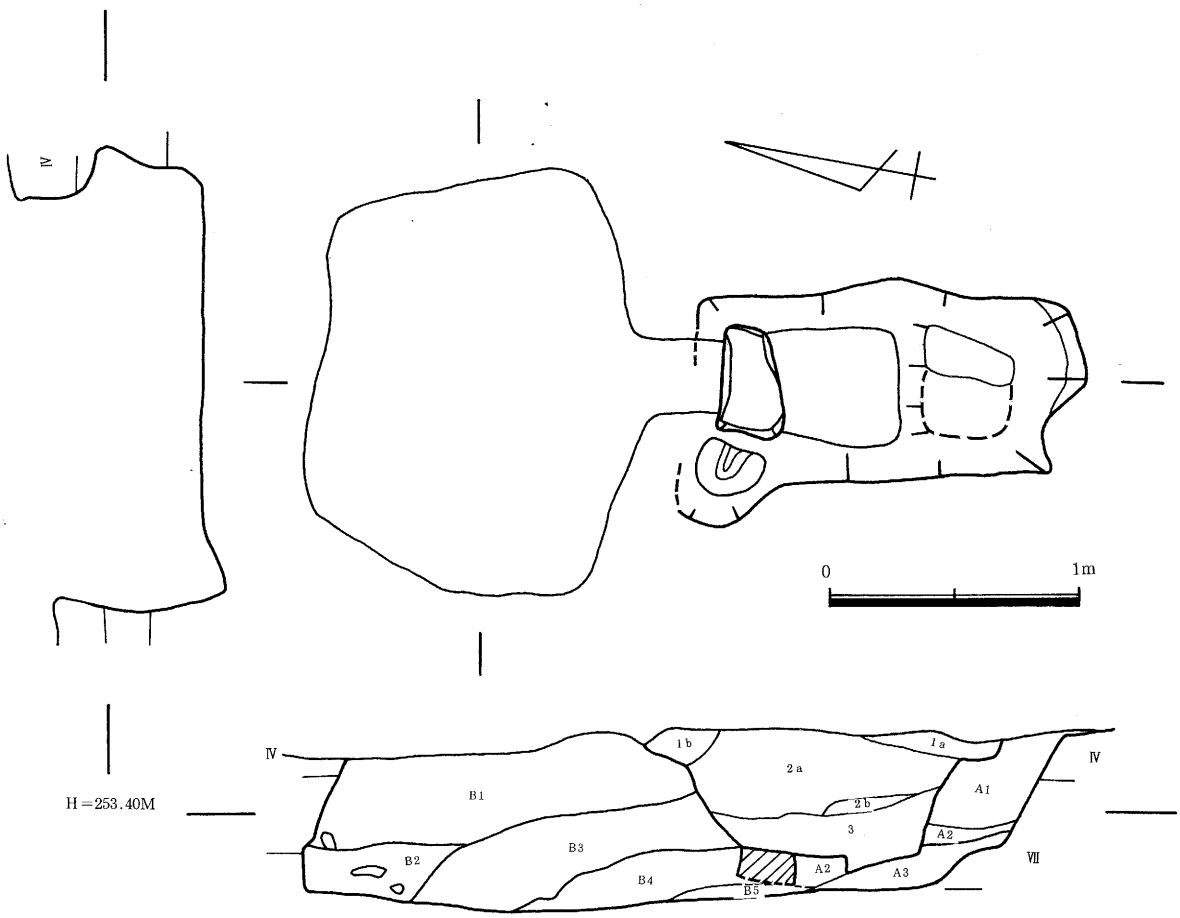
SD54-1a：灰～暗灰色土（混Ⅳ層粗粒）
1b：暗灰色土＋淡灰白色微砂＋淡黄白色微細砂
2a：灰色土＋淡灰白～灰白色微砂
2b：1aと同じ
2c：1b+2b
3　：灰＋淡黒灰色土（混Ⅳ層粗粒）
4　：灰～暗灰色土＋淡黄白微細砂＋Ⅳ層細粒

SD55-1　：淡茶灰＋暗灰色土（混微砂）
2a：暗灰＋淡黒灰色土（混Ⅳ層粒）
2b：淡茶灰＋灰色土（微砂質）
2c：2a＋2b

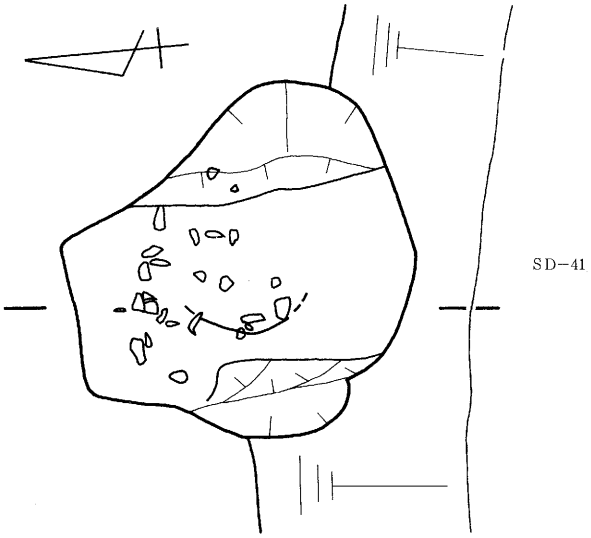
1：淡灰色粘質微砂＋淡黒灰色土
2a：灰～淡褐灰色土＋淡黒灰色土
2b：Ⅳ層ブロック＋淡黒灰色土

0　1　2m

第11図　蕨Ｃ－２区　東壁層序実測図



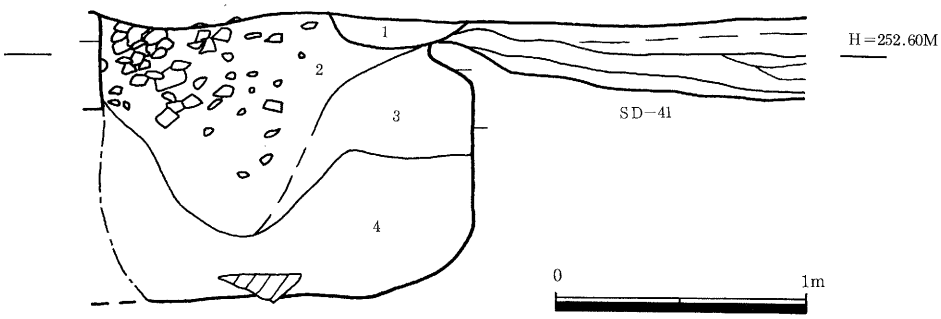
第12図　ＳＴ－3007　遺構実測図



竪坑
A1：淡黒灰色土
A2：淡茶灰色砂質土＋淡黒灰色土(混礫・Ⅳ層ブロック)
A3：淡茶灰色質土(混Ⅳ層粗細粒)

玄室（全て混Ⅳ層粗細粒～ブロック）
B1：灰褐＋淡黒灰色土
B2：淡黒灰＋灰褐色土
B3：灰褐色土＋淡黒灰色土
B4：淡黒灰＋暗灰色土
B5：淡茶灰色砂質土

撹乱
1a：淡茶灰色土（混Ⅳ層細粒）
b：暗灰色土
2a：灰褐＋淡黒灰色土（混Ⅳ層）
b：灰～暗灰色土
3 ：暗灰＋淡黒灰色土（混Ⅳ層）



1：暗灰色土
2：礫＋淡黒灰色土
3：淡黒灰色土
4：暗灰＋淡茶灰色土
（混Ⅳ層ブロック）

第13図　ＳＴ－3008　遺構実測図

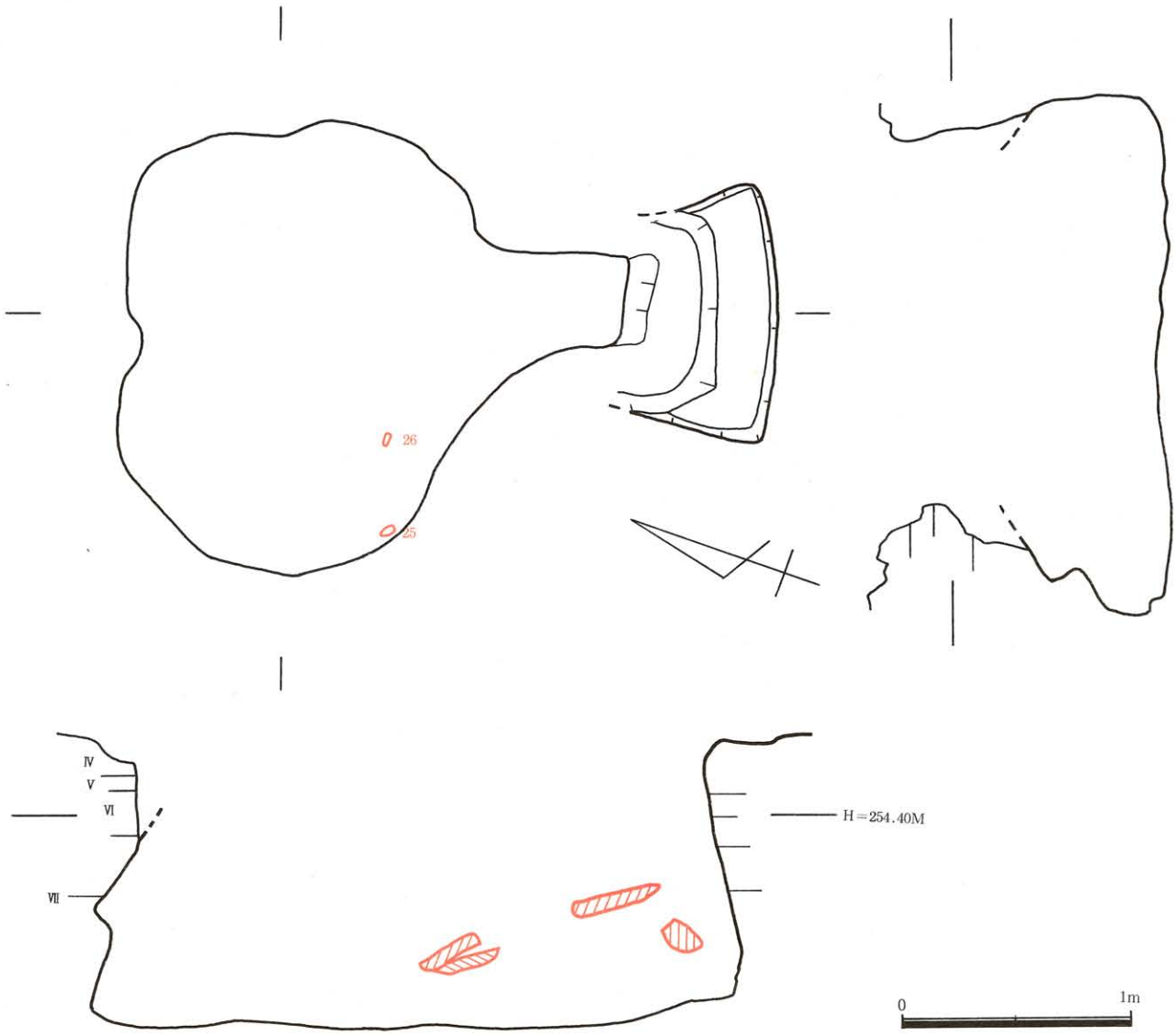
地下式横穴墓以外の出土遺物（第28・62図２～７）

全体的に遺物は少なく、ＳＴ－3015～18周辺に古墳時代の土師器片が10点余り、中世～近世の土師器や陶磁器片がII～III層に混入している程度である。

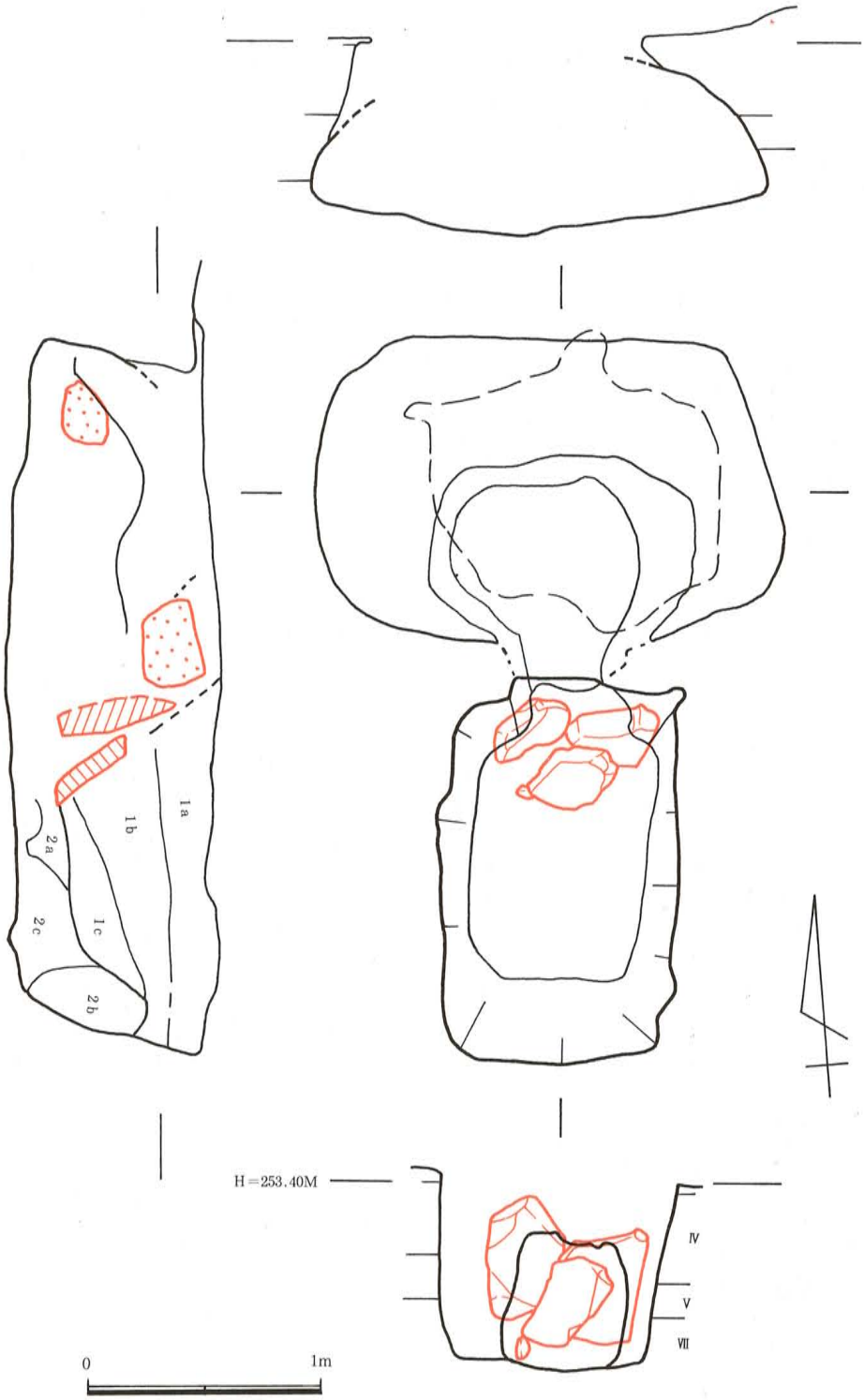
１はＳＤ－40の北西付近で出土した土師器で、外面はハケ調整で黄褐色、内面はナデで淡黄褐色を呈する。２は、Ｃ－０区のII層から出土した土師器の坏で、糸切底、外面は淡茶褐色、内面は淡桃褐色を呈する。

小結

当該地区は、古墳時代には墓域として、平安～中世にかけて開墾が始まり、近世以降は本格的な水稲耕作が始まっている。幅が広く、屈折したり深さも一定でない溝状遺構（ＳＤ－38・40）は中世～近世に掘削されているが、ＳＴ－3009・13・14・20などの地下式横穴墓の墳丘が遺存していたために、排水等の理由で掘削されたと推定される。



第14図　ＳＴ－3009　遺構実測図



1a：灰～暗灰色土　2a：黒灰色土＋淡茶灰色土
b：淡茶灰～暗灰色土　b：淡黄灰色土＋Ⅶ層＋1a
c：淡茶灰＋淡黒灰色土　c：1c＋Ⅶ層

第15図　ＳＴ－3010　遺構実測図

4．蕨Ｄ地区（第30図，31図）

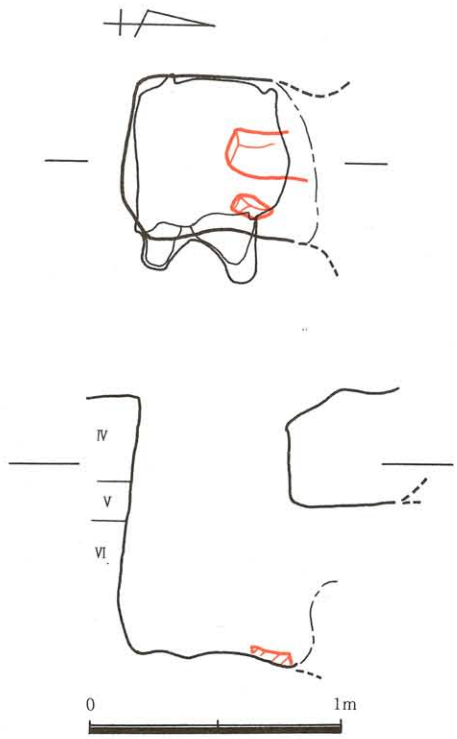
圃場整備において道路と水路が設けられる所であり、地下式横穴墓の存在が予想されたために調査を実施した。対象地は３区に分けて、重機によりⅣ層（アカホヤ）上面まで削平した。

１区はⅥ層まで削平されており、遺構面は表土下0.4～0.6mである。北西部では幅40cm内外・深さ５～10cmの溝状遺構を検出した。この溝から北西側は凹地となりⅢ層（黒色土）が90cm堆積している。東壁沿いの溝状遺構は深さ10cm内外で、彎曲している。

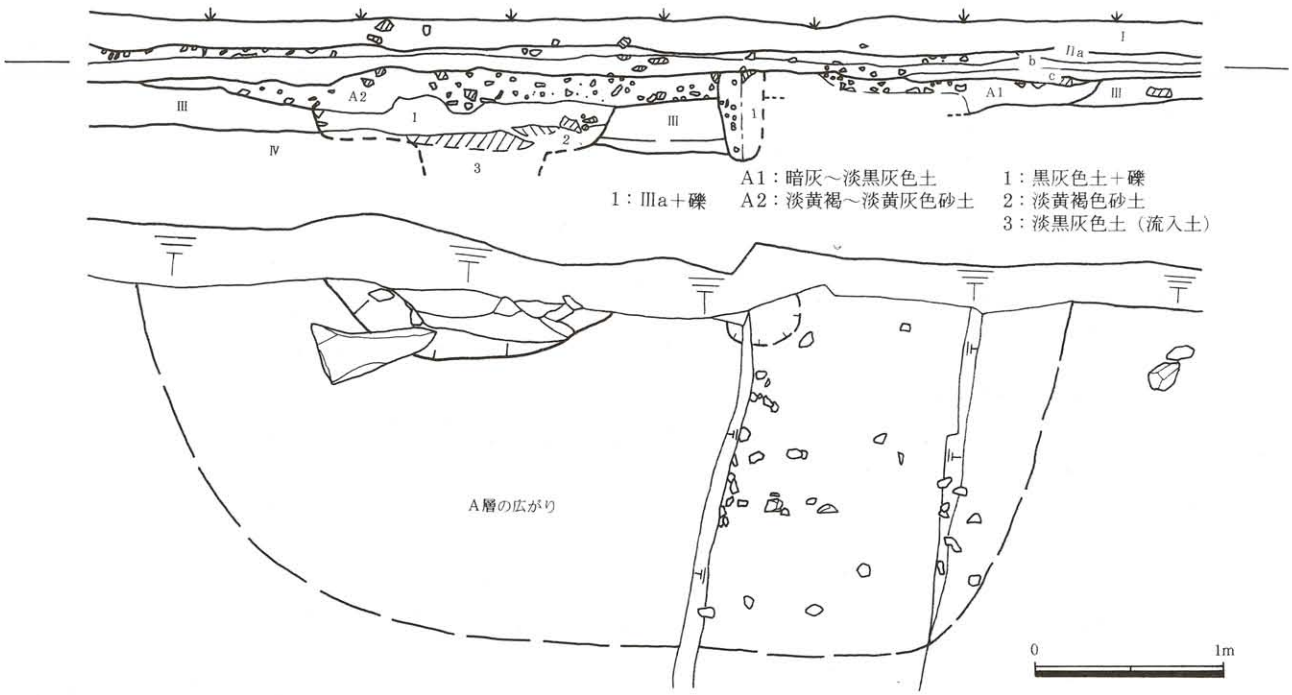
２区の北側には、Ⅳ層を掘り出した畦畔１条が、中央部には掘立柱建物跡（ＳＢ－01）と推定される柱穴状遺構が検出された。形状は円～楕円形で、直径15～45cm、深さ４～９cmと一様でなく、配列も不完全であるが、簡易小屋程度の建物跡であろうと思われる。

２～３区の東側では、幅３ｍ前後の溝状遺構を検出し一部を調査した。その結果、東肩部は浅い掘り込みで、幅２ｍ、深さ0.7mの本体があり、その東にはⅣ層削り出しの畦畔（ＳＲ）と溝状遺構と推定される掘り込みがあり、畦畔と水路のセットであろうと思われる。

出土遺物は極めて少なく、しかも細片であり、これら遺構の年代が決定できないが中世後半（15世紀前後）であろうと思われる。



第16図　ＳＴ－3011　遺構実測図



第17図　ＳＴ－3012　掘削排土と北壁層序

5．久見迫Ｂ地区

はじめに

試掘溝Ｈ１の調査で地下式横穴墓１基と中世の土壙墓が検出され、Ｉ１～Ｊ２では中世～近世の柱穴や溝状遺構が検出されたため、道路・水路として施工する範囲に付いて発掘調査を実施した。調査区の100ｍ西側では、昭和47年度の九州縦貫自動車道建設に伴う事前調査において、地下式横穴墓が10基確認された。当該地区をＡ地区とし、昭和63年度調査区をＢ地区として、以下、報告する。Ｂ地区は４区に分けて、西半分を１区、東半分を２～４区とした（第32図）

基本的層序

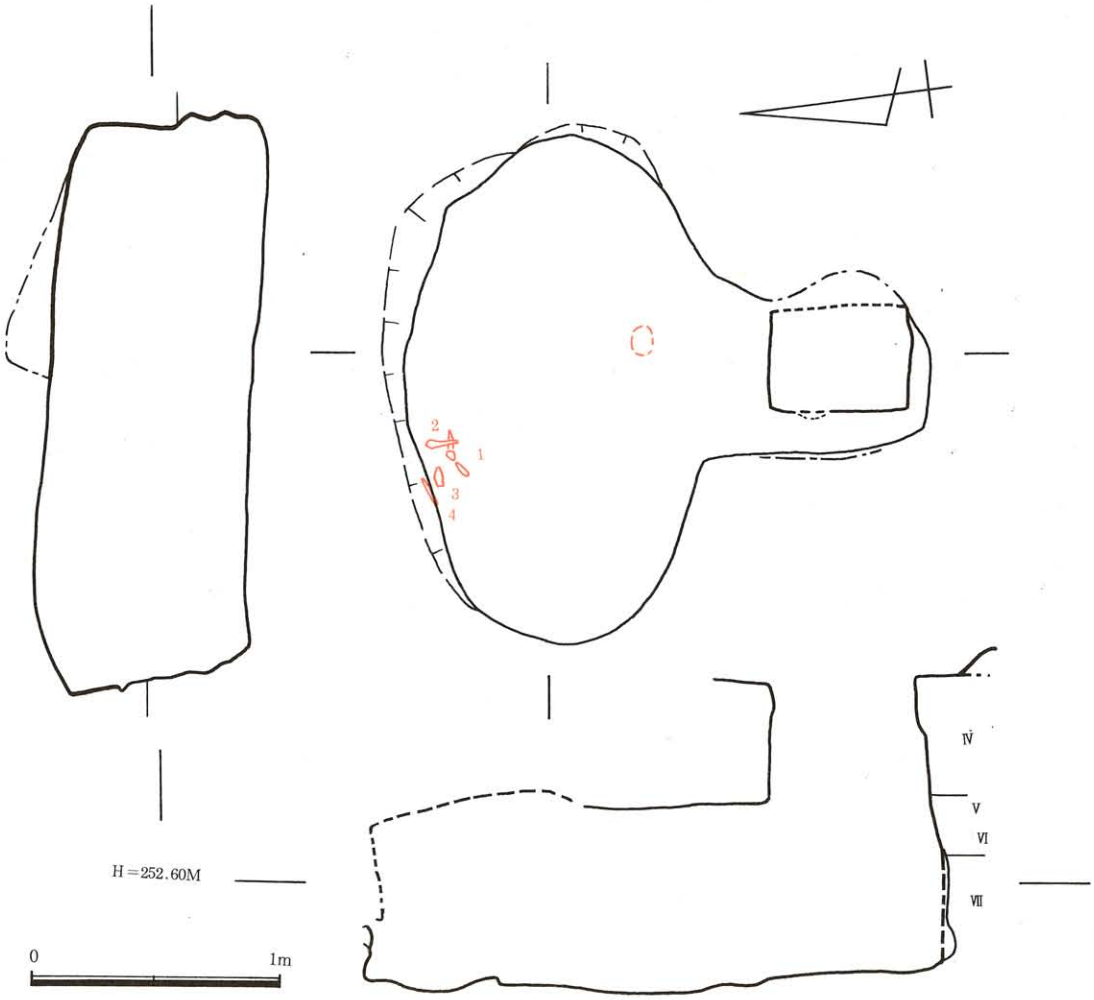
２～４区の南側は、周辺で一番高い微高地であり、現在、宅地や畑・山林となっている。調査結果も同様で南側の遺構面は高く、後世の開墾によって削平・削失を受けている。旧地形の礫層が盛り上がる凸面がこの微高地にあたる。基本的層序は、１区は他の地区と変わらず、Ⅲ層（黒土）の下にⅣ層（アカホヤ）が一面に現れるが、３区では表土の下は礫層（Ⅷ層）で、１ｍ近く削平されている。４区では東に向かって基盤が下降している（第33図）。

縄文時代の遺構と遺物（第70図，図版45）

４区の南壁において、Ⅵｂ層から掘り込む柱穴状遺構２基を確認し、Ⅵ～Ⅶ層内で縄文時代早期の山形・楕円形押型文土器（１～４）を、近世の溜池状遺構（ＳＺ－11）から縄文時代晩期の底部片（５）を検出したのみである。

弥生時代の遺構と遺物（第71図，図版45）

遺構は削失しているが、遺物包含層や中世～近世の遺構埋土から免田式土器（１～３）や細片が出土している。器面の摩滅はほとんど無く、付近（微高地）に集落が存在すると思われる。



第18図　ＳＴ－3013　遺構実測図

古墳時代の遺構と遺物

１～３区において、地下式横穴墓13基（ＳＴ－4001～4013）と土壙墓（ＳＫ－107，110）を調査した。当該地区には、中世の遺構が多く、攪乱されている。

ＳＴ－４００１（第34図，図版24）

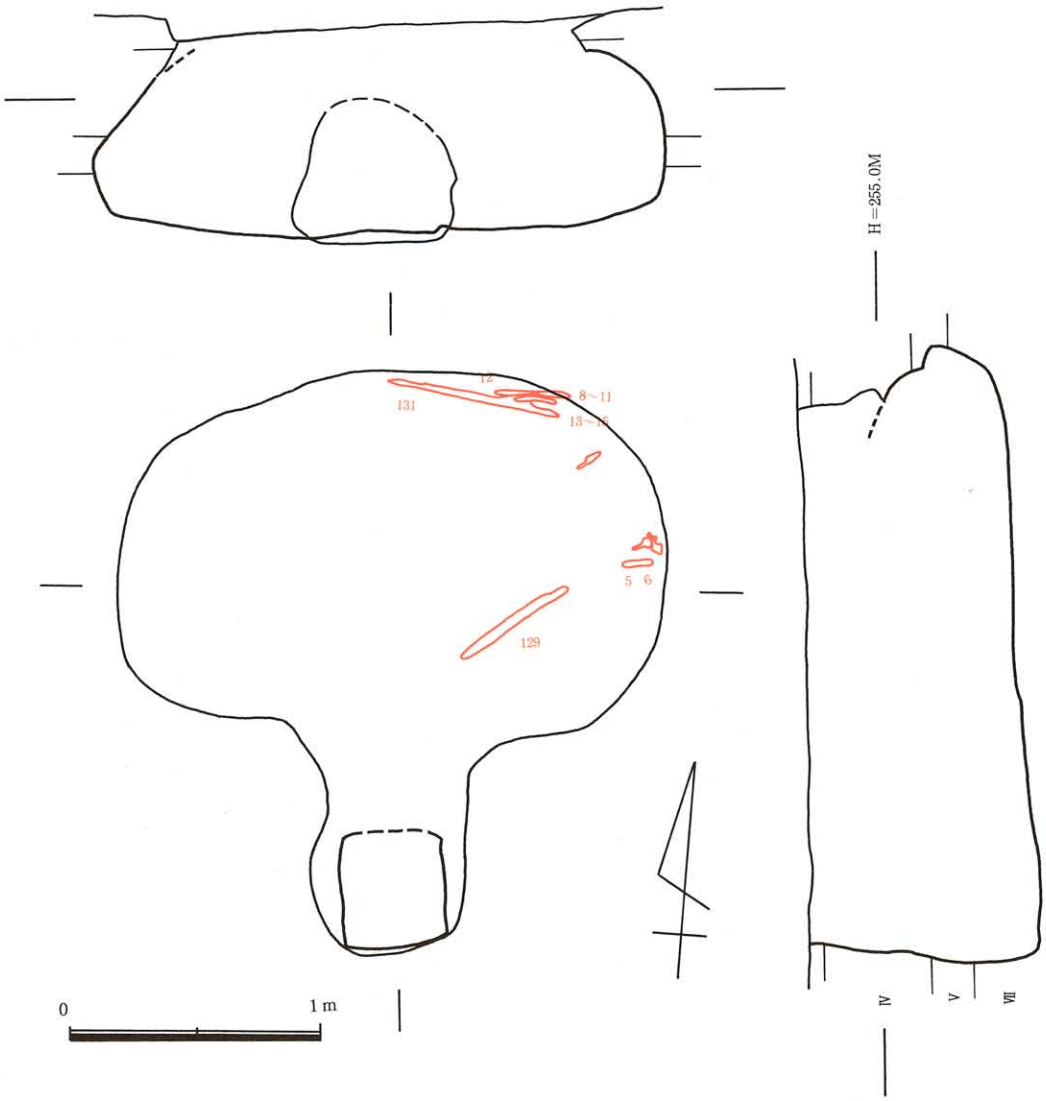
検出時、玄室の右裾部に風倒木痕が重複していたが調査員（筆者）の確認が薄かったために遺構との関係が不明瞭になった。

当墳墓は主軸を北東に向けた、羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。風倒木の影響で、玄室の右半分は掘り肩が不明瞭である。断面層序図とで推定すると竪坑は、長さ1.3m前後、幅1.5m、深さ0.6mを測る。羨門にはアカホヤ塊が小量遺存していた。玄室左側は中央に突出部があるものの旧状を保つ。玄室の奥行きは1.4m前後、幅は2.8m前後と推定される。

玄室の奥壁沿いには、床面から30cmのレベルに折れ曲がった大刀１振（第50図－127）が、左側には小刀１と圭頭鏃２、三角形長頸鏃16本が折れて混在した状況であった（第46図－１～20）。大刀の現存長は88cmである。

ＳＴ－４００２（第35図，図版25）

中世の柱穴に穿たれ、上部50cm程度が削平された、主軸が北寄りの羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。竪坑は長さ1.66m、幅1.32mのＤ字型を呈し、深さは0.56mで羨門前が一段低い。羨門はアカホヤ塊で閉塞されている。羨道底面は緩やかに上昇し、玄室の床面が高くなる。玄室は奥行き1.35m、幅2.16mを測る。副葬品は３群に分かれ、圭頭鏃３、三角形長頸鏃３、刀子１（第46図－21～27）がみられた。また、奥壁沿い中央部と右裾部には赤色顔料（朱か）がみられ、少なくとも２体の被葬



第19図　ＳＴ－3014　遺構実測図

者が推定できる。

ＳＴ－４００３（第36図，図版26）

中世の柱穴に穿たれ、羨道から玄室にかけての天井は崩落し、上部50cm程度が削平されている。主軸は北寄り、羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。竪坑は長さ1.5m、幅1.3mのＤ字型を呈し、深さは0.6mを測る。

玄室の奥行きは1.40m、幅は1.90mを測り、右奥に三角形鏃１、三角形長頸鏃２、刀子２（第46図－28～32）が副葬されていた。

ＳＴ－４００４（第37図，図版27）

羨道部の攪乱が著しく、上部30cm程度の削平を受ける。主軸は北寄り、羨門閉塞・平入り略方形タイプである。竪坑は長さ1.65m、幅1.6～1.7m、深さ0.78mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。玄室はいびつで、左側には50cm程度「側面」としての意識がみられる。奥行きは1.50m、幅1.70mで、高さは0.40mと極めて低い。

副葬品は多く、大刀１振のほか圭頭鏃２、三角形鏃２、腸抉柳葉鏃１、柳葉長頸鏃１、三角形長頸鏃８、三角形片逆刺長頸鏃１、型式不明鏃１、刀子１、小刀１、轡１がある（第47図－33～56，第50図－128）。大刀は鋒を欠き、現存長48.2cmである。

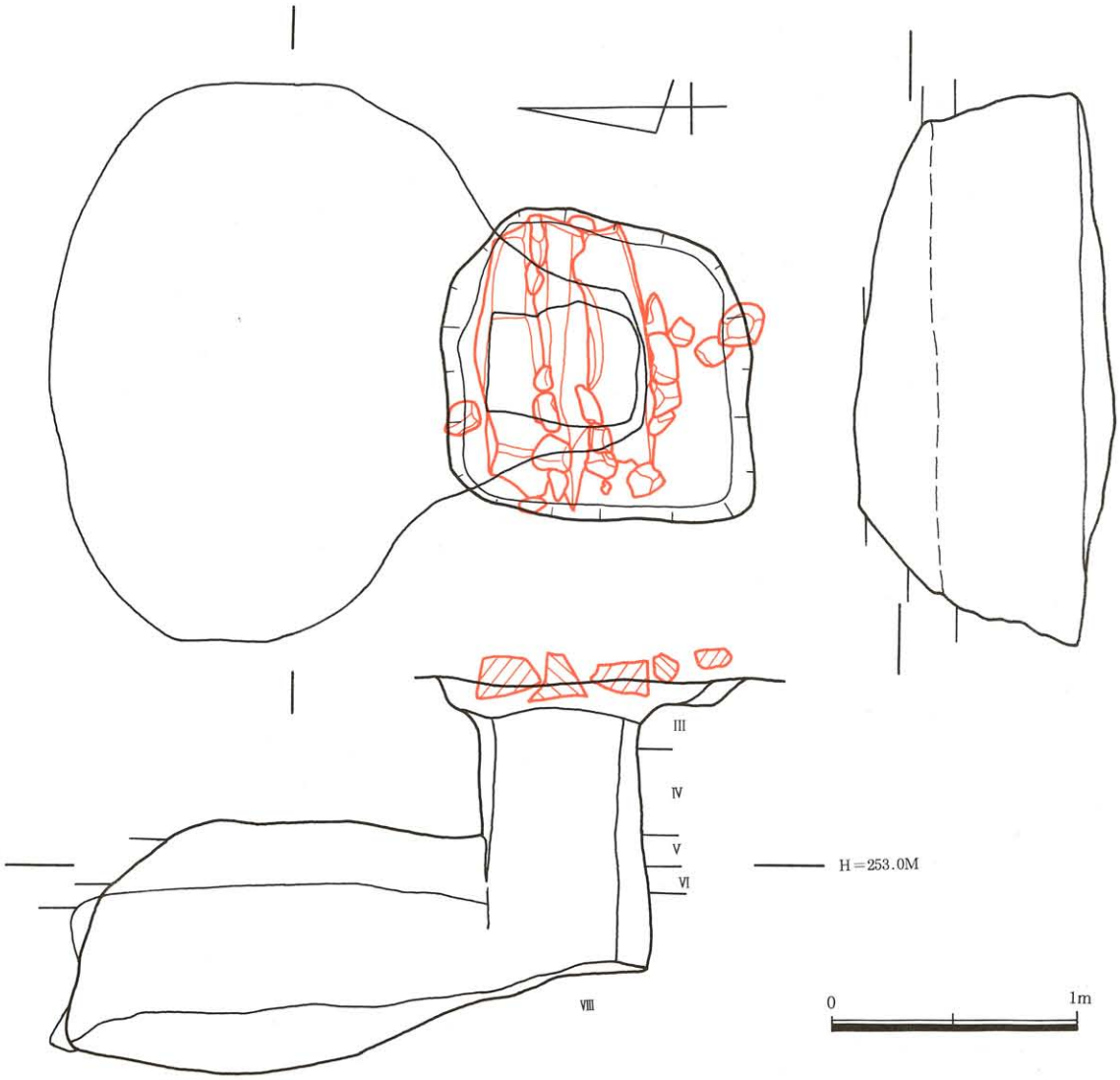
人骨は遺存していなかったが、鉄鏃が３群であることから、被葬者は３人と推定する。

ＳＴ－４００５（第38図，図版28）

上部20～30cmが削平され、主軸が北東に屈折する羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。

竪坑は長さ1.60m、幅1.2～1.54mの略台形を呈し、深さは1.06mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。玄室は奥行き1.40m、幅2.06mで、羨道よりも若干高い。

副葬品は豊富で、剣１振のほか圭頭鏃１、片刃長頸鏃



第20図　ＳＴ－3015　遺構実測図

5、三角形長頸鏃３、型式不明鏃１、刀子１がある（第48図－64～80，第50図－126）。剣は70.4cmを測る。

人骨は遺存していないが、副葬品の位置から被葬者は２～３人と推定される。

ＳＴ－４００６（第39図，図版29）

玄室の左側と上部20～30cmを後世に掘削され、天井が崩落していた。主軸は北東で、羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。

竪坑は長さ1.7m前後、幅1.6mのＤ字形を呈し、深さは1.17mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。

玄室は奥行き1.46m、幅2.4m前後である。奥壁側には赤色顔料があり、片刃長頸鏃２本と三角形長頸鏃13本、不明２本の束が、手前には刀子２と鉄鏃の茎部２が副葬され、刀子（94）の手前に人骨片が遺存していた（第48図－81～95）。

副葬品の配置から、被葬者は２～３人と推定される。

ＳＴ－４００７（第40図，図版29）

調査当初は竪坑のみ検出し、調査区外も拡幅して玄室の状況を確認したところ、天井は崩壊して埋没していたので保存することとした。

上部が20cm程度削平され、主軸を南南西にとる羨門閉塞のタイプである。竪坑は長さ1.44m、幅1.34mのＤ字形を呈し、深さ0.80mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞している。

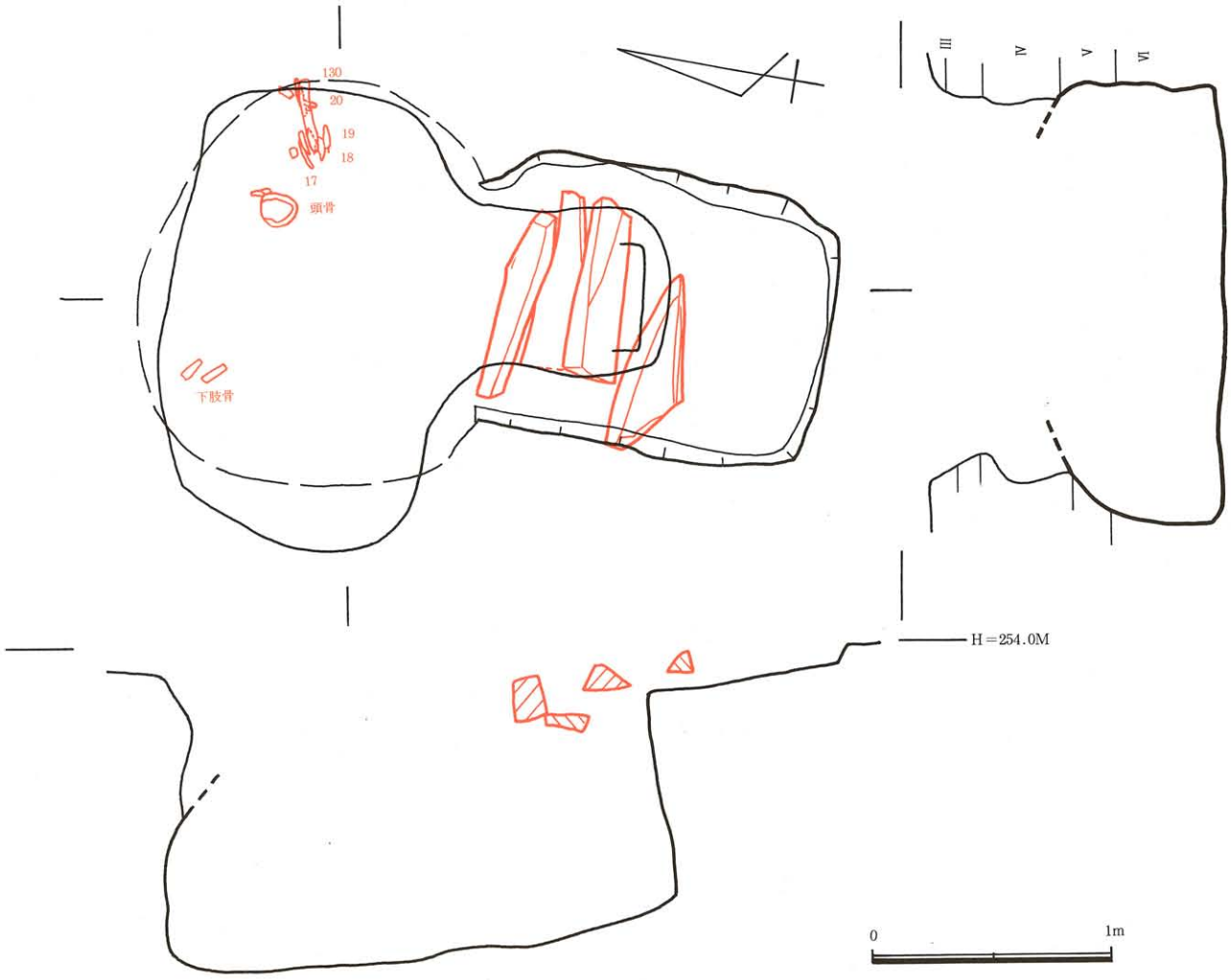
ＳＴ－４００８（第41図，図版30）

玄室の天井は崩落し埋没していた。主軸は南東寄りで羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。

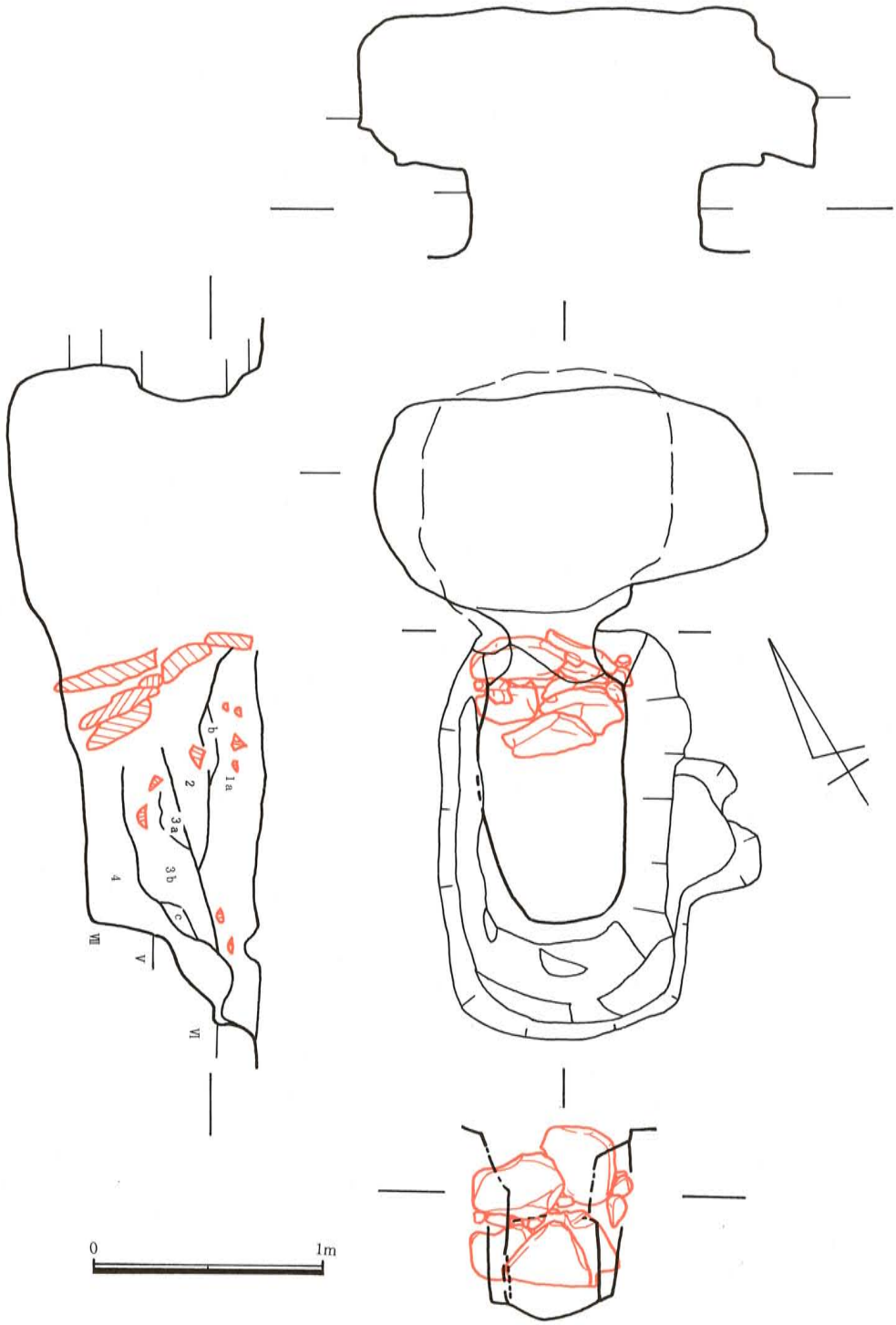
竪坑は長さ1.60m、幅1.40mのＤ字形を呈し、深さ0.84mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。

玄室は奥行き1.58m、幅2.30mを測る。左奥は突出し、その手前に柳葉鏃１と長頸鏃４、刀子２が一括して副葬されている（第47図－57～62）

人骨は遺存していない。



第21図　ＳＴ－3016　遺構実測図



第22図　ＳＴ－3017　遺構実測図

ＳＴ－４００９（第42図，図版31・32）

当初は玄室上面周辺に黒色土と焼土が堆積しており、掘り下げたところ、地下式横穴墓であると判明したため土層観察用土手を除去して竪坑まで検出した。

主軸は西向きの、羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。竪坑は長さ2m、幅1.7mの隅丸長方形を呈し、深さは1.1mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。

玄室は１段高くなり、幅2.49m、奥行きは0.8～1.5mの不整形を呈する。中央部には、腸抉柳葉鏃１点のほか三角形鏃１、三角形長頸鏃７、刀子２が一括して副葬されていた（第48図－96～111）。

人骨は、遺存していない。

ＳＴ－４０１０（第56図左上，図版32）

近世の溜池状遺構掘削により竪坑から玄室の半分以上を削失し、残存部も天井が崩落していた。

主軸は北寄りで、玄室の幅は2.2m前後と推定される。左奥にあたるところから片刃鏃１点が出土した（第47図－63）。人骨は遺存していない。

ＳＴ－４０１１（第43図，図版33・35下）

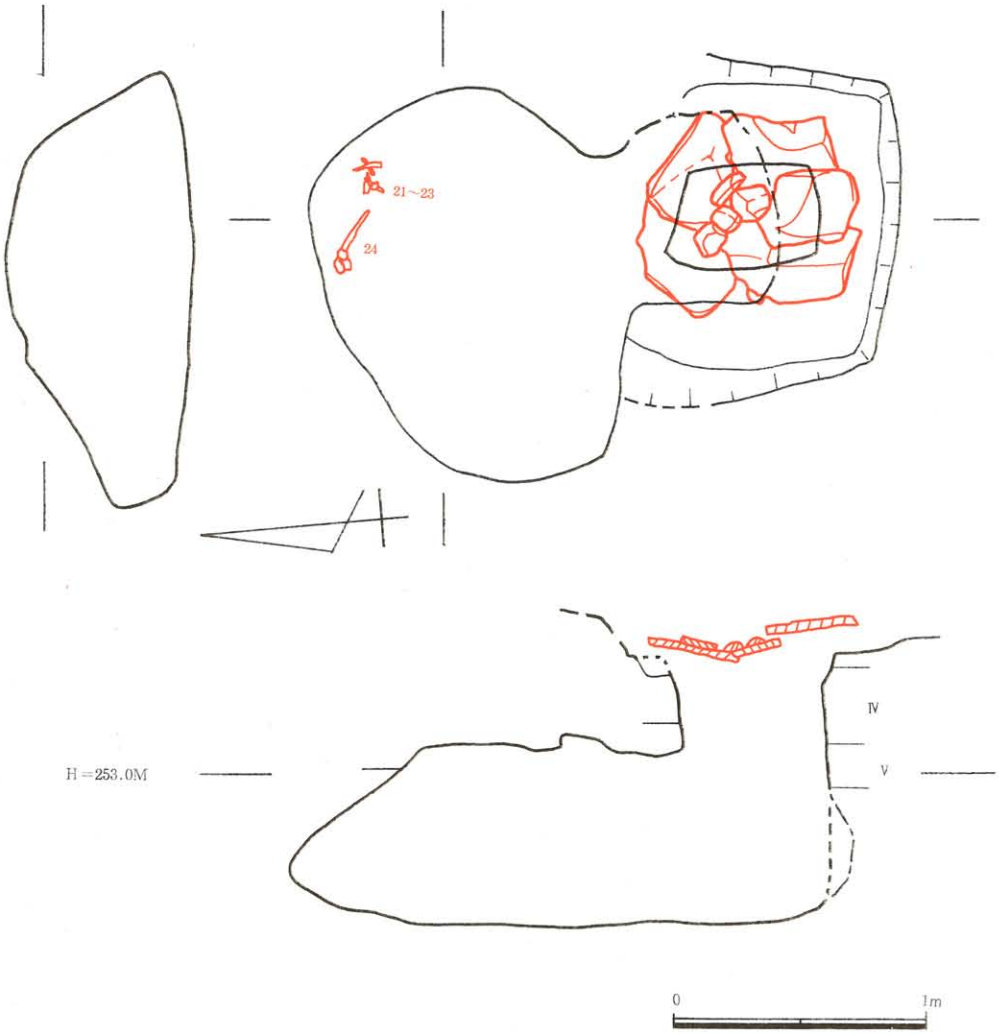
主軸は東南東に向き、玄室は微高地の斜面に位置している。玄室側は上部40c程度が削平され、天井も崩落していた墳墓で、羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。

竪坑は長さ1.88m、幅1.40mのＤ字形を呈し、３段掘り、最深部の深さは0.94mを測る。羨門はアカホヤ塊と礫で閉塞される。羨道から玄室へは急上昇し羨道の幅も広がる。

玄室は奥行き1.40m、幅2.04mを測る。副葬品は豊富で、小刀？１点のほか腸抉柳葉鏃１、三角形鏃１、方頭鏃１、長三角形長形鏃５、片刃長頸鏃１、形式不明１、轡１がある（第49図－112～125）。また配置状況から、被葬者は２～３人と推定される。

ＳＴ－４０１２（第44図，図版34）

主軸を北東にむけた、羨門閉塞・平入り楕円形タイプであり、玄室の天井は崩落していた。



第23図　ＳＴ－3018　遺構実測図

竪坑は長さ1.82m、幅1.68mのD字形を呈し、深さは0.88mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。

玄室は奥行き1.20m、幅2.08mを測る。人骨および副葬品は皆無である。

ＳＴ－４０１３（第45図，図版35）

Ⅲ層上面から掘り込む竪坑を検出した。羨門閉塞・平入り楕円形タイプである。

竪坑は長さ2.2m、幅1.8mのD字形を呈し、深さは1.18mを測る。羨門はアカホヤ塊で閉塞される。

玄室は天井が低く（0.3～0.5m）調査が困難であったことから重機で半截した。奥行きは1.34m、幅は約２ｍである。人骨および副葬品は皆無である。

ＳＫ－１０７（第32図，図版36）

３区の西側で検出した、長さ1.2～1.5m、幅0.95mの台形を呈し、深さ0.1mで長軸を東西に向けた土壙墓である。当遺構の検出面はⅧ層（礫層）上面であり、上部約１ｍが削平されている。

北西隅には轡（第52図－１～３）が副葬されていた。

ＳＫ－１１０（第51図，図版37）

長軸がほぼ東西で、長さ1.53m、幅1.16mの楕円形を呈し、深さは0.90mを測る。

底面近くで、轡（第52図－４・５）が出土した。断面層序から、木棺墓の可能性が推定される。

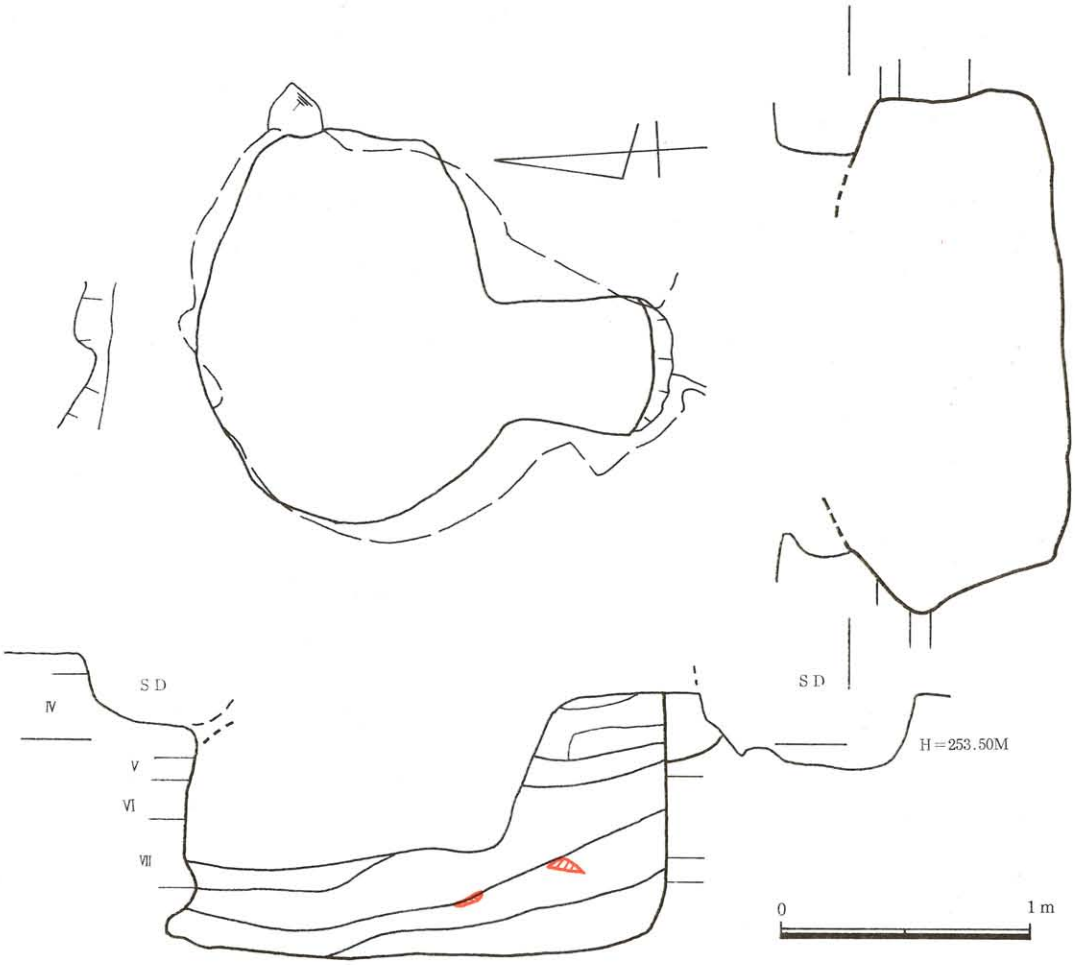
その他古墳時代の遺物

ＳＴ－4011竪坑の西側において、土師器と須恵器が散在していた（第55図，表６）。土師器は壷と甕が多く、須恵器は甕の胴部だけで、破砕された状況でもない。位置的には、ＳＴ－4008か4011の墳丘祭祀に用いられた土器であると推定される。

試掘溝Ｆの西側では須恵器の坏身を表採（第64図－１，表10）し、ＳＺ－11からは坏蓋（第64図－２）が出土しており、付近の墳墓群の祭祀年代を示している。

中世以降の遺構と遺物

微高地縁辺にあたる当該地区は、中世になると集落が営まれ、墓域は廃絶される。柱穴は近世末までを含めて約1,000基検出したが、建物の復元にまでは至っていない。



第24図　ＳＴ－3019　遺構実測図